

念願叶って

中国滞在六十年
残留婦人と違法入国

牟田 不作

目次

<u>題 目</u>	<u>頁</u>
はじめに	3
関連地図	4
登場人物	5
前編 中国へ	6
満州移住	7
肉親との別れ	9
湖南省へ	12
人民公社から文化大革命へ	13
子供たちの独立	17
念願叶って日本へ	19
後編 日本へ	26
歓迎されない帰国者	27
引っ越し	30
日本語研修センター	32
入国管理局	35
偽造旅券	39
身柄拘束	42
児童相談所	46
強制送還	48
長期入院	50
匙を投げられる	56
娘家族の来日	58
あとがき	62

はじめに

1999年、厚生省(現在の厚生労働省)が中国残留婦人の身元引受を依頼してきました。その12年前の1987年に、本著者は残留孤児の身元を引受けていました。これは、厚生省による残留孤児調査が正式に始まって6年が経ったときでした。そして、冒頭のように、1999年になって再び身元引受を頼まれたのです。これが本書の物語の発端です。

残留孤児と婦人という大きな年齢差があるとはいえ、一回目の楽しい思い出から気楽に身元引受人になりました。

ところが、このインターネットの時代、情報の伝達と取得が非常に速く、瞬く間に困難に突き当たりました。そして、解決には長い時間がかかりました。

本書の主人公は、念願叶って帰国された婦人です。60年以上も中国南部に残留したあと、日本の地を再び踏みました。そして、わずか半年足らずで偽家族が露見し、その念願が砂上の楼閣のように崩れはじめました。しかし、同伴入国した偽家族が強制送還された後、本人は違法入国のレッテルからわずかに逸れ、幸運にも、その立場が逆転していきます。そうした内容の特殊性を考慮して、登場人物はすべて仮名にしました。

本書は事実に基づいていますが、厳密な記録書ではありません。一人の人間が自分と肉親の幸せだけを考えて為した行動と、その行為の特殊性に注目して書いた物語です。この後に関連地図と登場人物の紹介を要約してあります。参照しながら読み進んでください。

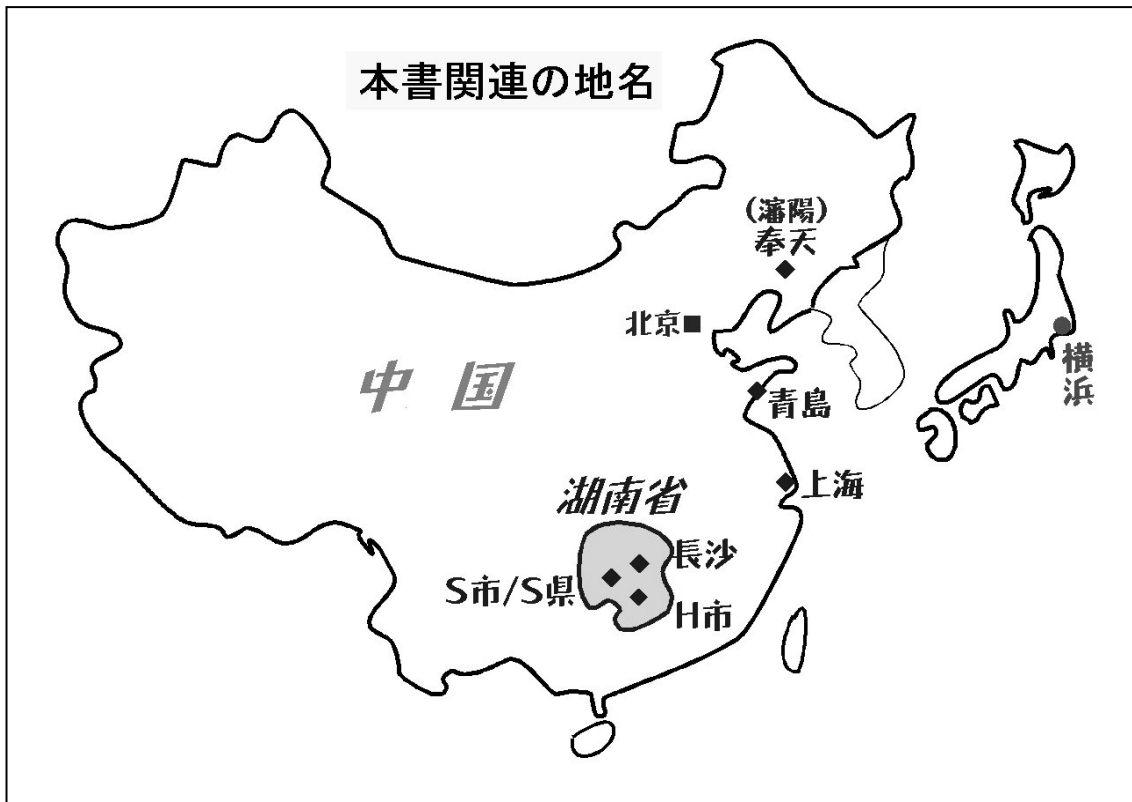
2000年12月まで、わずか半年の間に、多くの人々から心強い協力をいただきました。特に、法務省東京入国管理局J部門主席、同横浜支局、厚生省社会・援護局中国孤児等対策室、中国帰国者定着促進センター定着指導課、神奈川県福祉部生活援護課、横浜市某区福祉事務所保護課、自立研修センター、横浜市福祉サービス協会、横浜市某地域ケアセンターの方々に深く感謝いたします。

北京滞在中には本残留婦人親戚の息子さんの世話を受けました。長沙とS県では本残留婦人の故夫の親戚二人に交通案内及びホテル案内をしていただきました。G女史とK病院事務長Nさんには、入院でお世話になりました。学生のアミカさんには中古家具の手配と、本著者中国訪問時に鳥の世話をさせていただきました。自立アドバイザーの藤堂佐知子さんには中国側との対応で協力いただき、有難うございました。

最後に、本著者を中国へ連れて行ってくださった通訳／翻訳家の満谷扶美子さんには感謝の念で一杯です。

2002年3月

牟田不作



登場人物 説 明

- 牟田 不作——作者、身元引受人
藤堂 佐知子——自立アドバイザー
満谷 扶美子——中国語の通訳／翻訳家
海中 雅恵——元中国残留婦人、主人公
海 雅英——海中雅恵の中国名
干 学文——海中雅恵の最初結婚相手
叶 鵬伯——海中雅恵の二度目結婚相手
龍——叶鵬伯の本妻
叶 果正——海中雅恵と叶鵬伯との長男
王 悠蓮——叶果正の妻
叶 銀紅——叶果正と王悠蓮の長男
叶 群——叶果正と王悠蓮の長女
叶 寧心——海中雅恵と叶鵬伯との長女
金 建生——叶寧心の夫
金 華月——叶寧心と金建生との長女
金 光月——叶寧心と金建生との次女
金 威生——叶寧心と金建生との次男
- 李 修民——叶果正と名乗り、海中雅恵と左記五人を連れ来日
徐 麗青——王悠蓮と名乗る女、李修民の妻
李 芬——叶・王の長女（叶民芬）と名乗る、李修民の兄の子
李 明成——叶・王の長男（叶民成）と名乗る、李修民の兄の子
李 冰冰——叶・王の次女（叶冰冰）と名乗る、李修民の長女
李 真真——叶・王の次男（叶真真）と名乗る、李修民の長男
- 山元——厚生省（現在の厚生労働省）への最初の連絡人
廖 青——厚生省への次の連絡人
宋 曉文——日本在住中国婦人、廖青の娘
M氏——最初の身元引受人、海中雅恵の従弟
襖 英子——海中雅恵の従姉、中部地方在住
鄭 恵運——元中国残留孤児、海中雅恵と同時に帰国
- 中石——生活保護ケースワーカー
灰山——東京入国管理局主席

前編 中国へ

前編「中国へ」は海中雅恵の体験の聞き語りである。雅恵の歴史が第二次大戦前の1939年から2000年2月まで展開する。

満州移住

1939年といえば、昭和14年、ノモンハン事件の起こった年である。既に不当に建国されていた満州国と、ソビエト連邦との間の国境問題紛争による軍事衝突事件であった。ヨーロッパではドイツがポーランドに侵攻し、第二次世界大戦が始まった。

この年、雅恵はまだ12歳、尋常小学校を卒業したばかりであった。日本軍の侵略による領土拡大に歩調を合わせて、実に多くの日本人が中国東北部(当時の満州)に渡っていった。

雅恵の父も、そのような日本人の一人であった。彼は中部地方の出身で、東京に働きに出ている。

「雅恵、お父さんは転勤で中国に行くことになった。もう小学校を卒業だね。弟と妹の面倒をみってくれるよね」

父が雅恵に大きな期待を抱くのも、「雪のように色白」といわれた雅恵の母が、一年ほど前に他界していたからである。この母は中部地方の生まれで、絹の機織をし、一年くらい病気をした後、死んでいった。その後、雅恵が弟妹の面倒を見ながら、炊事洗濯をすべてこなしていたため、勉強する時間がなかったという。

「でも、お継母^{かあ}さんはどうするの？」

と雅恵が訊くと、

「もちろん皆と一緒に行きさ」

と父は答えた。

物心のつかない三女はまだ幼かったので、養子に出すことになり、結局、満州には5人が行くことになった。父と継母、それに姉妹と弟である。雅恵自身は満州移住に異論はなかった。中部地方の小学校を過ごしたのも、都合で転校した最後の学年だけだったし、それに父の転勤で長く同じ学校にいたことがなかったからである。

もう一つ重大なことは、父の転勤先が辺境地ではなく、都会だったことである。いわゆる満州開拓でなかったため、日本敗戦直前のソ連軍侵攻による悲劇の逃避行をまぬがれたのが、後で不幸中の幸いになる。もちろん、そのときの雅恵は、そんな運命になることなど知る由もなかった。

1939年の秋、東海道線、山陽線と乗り継いで下関港に五人が揃い、朝鮮半島の釜山に向けて船出した。関釜連絡船が走る距離はそれほど長くない。東京 - 八丈島間より短い、それでも朝鮮半島に到着するのに一晩かかった。

釜山見物もそこそこに5人は汽車で出発し、京城(現在、ソウル)を経由して奉天に到着するまで車内で一昼夜過ごした。当時の奉天は、現在は瀋陽となっている。その奉天で、雅恵の父は南満州鉄道株式会社(満鉄)の事務職に就いた。奉天の社宅に空きがなかったため、一時的に

熊岳城^{ゆうがく}に住居を構えた。雅恵は12歳を過ぎており、高等小学校に入学、妹と弟は尋常小学校で勉強した。1年ほどで奉天に引っ越し、そのまま終戦を迎えることになる。2年間の学校生活での思い出は、熊岳城で海水浴に行ったこと、遠足でハルビンへ行ったこと、そして汽車に乗り一人で大連病院へ通ったことである。蓄膿症で評判の良い病院が、奉天ではなく大連にあったので、わざわざ遠くの病院へ行ったのである。

雅恵は学校を卒業した後、16歳のとき満州銀行に就職した。1943年のことである。働き始めて

給料をもらうと、映画館に行くのが大きな楽しみとなった。まだ若かったので、
「映画を見るのは、いつも女友達と一緒にでした」
と雅恵は回顧している。

奉天へ来て四年目に25歳の青年に恋をし、
「映画に連れて行ってもらい、よく喫茶店でお茶を飲んで過ごしました」
と楽しく思い出している。
「まだ16歳と若かったので、結婚は父に反対されました」
とも語っている。

年月が経つにつれ、会社からの帰りが遅くなり10時、11時となると、さすがの両親も厳しくしかるようになった。そこは悪知恵の働く年頃で、徐々に軌道修正をはかり、映画の代りにショッピングでの楽しみを覚えて行った。これだと、帰りが10時を過ぎるようなことはなかった。月日の経つのは早いもので、友達には次々に恋人ができていった。色白の雅恵に、ようやく恋人ができたときには、戦争が終焉を向かえた後であった。

肉親との別れ

雅恵の弟は、奉天の小学校を卒業後、ハルビンの商業学校に進学した。戦況の悪化とともに米軍やソ連軍による空爆が1944年に始まっていたが、それでも弟は希望に燃えて奉天を離れた。寄宿舎では人一倍勉強に励んだが、明るい外での読書が何より好きであったと、雅恵は語っている。悲劇は終戦直前に起きた。

いつもどおり校庭で本を読んでいると空襲警報が鳴り、友人たちは直ぐに防空壕に飛び込んだが、弟は本に夢中で逃げるのが遅れた。結局、この爆撃で3人が死亡したという。16歳の弟は、その犠牲者の一人となった。

「骨も何も残らなかったんです」

と雅恵は語る。これは1945年終戦前の出来事だった。妹を軍需工場の寄宿舎に残したまま、雅恵は父母と3人で急いで日本へ帰り、仮遺骨を墓に入れて直ぐに奉天へ戻った。

父親は、かつて海軍にいたころ感染した肺結核で悩まされていた。息子の死を目の当たりにした父には刺激が強すぎたのであろう。雅恵の話では、

「父は血を吐いて死んでゆきました。終戦直後のことで、亡くなった父を埋葬する余裕などありませんでした。私に残されたのは、妹と継母^{はは}だけでした」

という。

妹は学校を卒業して、奉天鉄西区の軍需ミシン工場に勤め、終戦時まだ十五歳だった。妹はここで着物作りが忙しく、寄宿舎に泊まらざるを得なかった。このため、兄の遺骨を父母や姉とともに日本に持ち帰る暇が取れなかったのである。

「一緒に帰っていれば、そのまま日本に留まる機会だってあったと思います。これが私の運命の分かれ道になったのでしょう」

と雅恵は語る。

このように終戦直前は、雅恵にとって仕事から帰っても妹も弟もおらず、自宅はあまり楽しい所ではなくなっていた。戦後、映画館は閉鎖され、日本人にとって苦難の道が待ち構えていた。追い討ちをかけるように、社宅が地元民によって破壊されはじめた。そして、自分と家族のために食料を調達する必要がでてきた。そのためには、働かなければならなかった。

1945年半ば頃の中国は、1937年の国共共同抗日戦線協定も表面上のことで、1941年の国共合作も崩壊していた。日本敗戦直前に、国民党軍は中ソ友好同盟条約を結び満州における権威を回復していた。特に奉天の国民党軍は1948年10月まで曲がりなりにも健在であった。8月18日に、まずソ連軍が進入し、次に八路軍、その後に国民党軍がやって来た。米軍も大きな港に駐留していた。

終戦後、このような状況下で国民党兵士が日本人に近づいても不思議はなかった。1945年も終わり近く、勤め口を見つけようと外出していた雅恵に、干学文という名の将校が親しげに話しかけた。もちろん中国語である。

「小姐！ 为了你有好工作」

「????」

中国語で話しかけられ、雅恵は意味がまったく解らなかった。どのみち家に帰っても楽しいこと

はないのだからと、雅恵は親切そうな将校と話をすることにした。日本語と共通の漢字を筆記して意志を通じ合った。

「誰？」

「国民党」

不安の中にも、雅恵の眼が輝いた。再びやってきた軍閥跋扈^{ぼっこ}の世で、

「国民党に取り入ろう」

十八歳の小娘が、そう考えはじめたのである。

「将校？」

と、雅恵が漢字を紙に書くと、

「是」

と将校が言った。雅恵は、この発音だけは意味がはっきり分かった。この日は、次に会う時間を約束してわかれた。

翌日、時間通りに将校の干がやってきた。

「待った？」

「いいえ」

「それはよかった。北市場で働いてみないか？」

と、将校が切り出した。もちろん、以前のようなデスクトップ作業ではなく、皿洗いだった。というわけで、雅恵は、この日から中国人町で朝から晩まで洗いつづけるようになった。

1945年もとくに過ぎ、1946年暮れが押し詰まってくると、雅恵の3人家族にも日本へ帰る機会がめぐってきた。

「雅恵、大連から船で日本へ帰れるそうだよ。3人でここを発とう」

と、継母が突然切り出した。日本へ帰れる……、夢のような言葉であった。しかし、雅恵には故郷といえる親しみのある町や村はなかった。父の転勤、家庭の事情で住むところを転々としたからである。

「おかあさん、私は中国に残ります。帰っても住むところがないし、それに、ここ奉天では働くところも住むところもあります。妹と2人で帰ってください」

その当時、雅恵は将校の世話で小さな住居を北市場の近くに構えていた。生活は曲がりなりにも安定していたし、なにより将校と会うのが楽しかった。しかし、それでも日本に帰る気持ちが突然湧き起こり、雅恵は将校に帰国の件で話をした。

「母と妹と一緒に日本へ帰ります。お世話になりました。明日ここを出ます」

すると、将校の顔がみるみる真っ赤になり、ピストルを抜いて、

「生きて日本へ帰れると思うな」

と大声で脅した。

この後、妹が何度も姉に同伴帰国するよう懇請したが、雅恵は折れることがなかった。1946年秋、36歳の継母とともに日本に出発する最後の日に、妹は、

「お姉さん、もう二度と連絡しませんから」

と言った。

それを最後に、雅恵は帰国した今でも50年以上、妹のことを口に出すこともなく、父母の墓参りをする事もなかった。

こんなに長い間、耐えに耐えてきた雅恵である。この54年後、日本に帰国したとき、すでに73歳を超えていた。

湖南省へ

1946年も半ばになると、国民―共産両党の「連合政府」交渉も決裂し、内戦が激化、満州はあっという間に八路軍の傘下に入った。それでも、新京(現在の長春)と奉天(現在の瀋陽)は、1948年半ばまで国民党軍が維持していた。しかし、その年11月の初めに奉天は共産側に占領された。

話を1946年末に戻そう。妹と継母が無事に北海道に帰った後、しばらくして雅恵は干将校にだまされていたことに気づく。ある日、見知らぬ女がやってきて、

「ちょっと、あんた」

と、いきなり雅恵に激しく殴りかかってきたのだ。干の正妻であった。雅恵は日本人で立場が弱かったので、じっと我慢した。当時、中国では妻を2人以上持つのは特別なことでもなかったらしい。何日か経って、正妻は怒って湖南省の自宅に戻ってしまった。

奉天では、国民党軍と八路軍との戦闘が激しくなり、将校の干は雅恵を湖南に送ることに決めた。北市場から鉄砲弾の下をくぐり抜け飛行場へ行き、プロペラ機で将校とその部下と共に山東省の青島(チンタオ)へ逃げた。飛行機を利用したのは鉄道が破壊されていたためである。弾にあたれば死ぬ運命にあった。

それでも、彼らは幸運にも全員飛行機に乗ることができた。20人乗り程度のあまり大きくない機体で鉄製のはしご(タラップ)で機内までよじ登って、椅子に体をバンドで縛り付けたという。干は将校だったので飛行機に乗る権利は楽に手に入ったが、一般の人も同じような強力なツテに頼ったのであろう。

青島に着いたあと、干はまた奉天へ戻った。一方、雅恵は部下に連れられ船で南下して上海へ行き、そこから汽車を乗り継いで湖南省S市へ向かった。しばらくの間、干の実家でその父と正妻と三人で暮らしたが、正妻に虐待された。義父も正妻も働かず、炊事その他の仕事が雅恵一人の肩にのしかかってきたのであった。叩かれ、蹴飛ばされても、干がやって来るまで、ただじっと我慢の娘であった。

一方、奉天に引き返した干は以前に負傷していた片足を八路軍との戦闘で悪化させ、跛行がひどくなった。その後、この将校は退役し湖南省に戻り、雅恵と正妻と3人で暮らしはじめた。このとき、中国の戦況は共産軍の有利に向かって傾いており、最終的には1949年10月1日の建国に至るのである。

正妻によるいじめは相変わらずで、「水汲んでこい」と言われ、水桶を担げなくて井戸端で泣いたこともあった。だが、それも一年足らずの辛抱で終焉する。1949年初めに、退役した干が湖南に戻って3、4カ月で八路軍に逮捕、拘束されたのである。彼はそのまま25年間も監獄に繋がることになる。

干は1974年に出獄し、その後、一人で物を売ったりして何年間か商売を続けたが、賭け事に儲けをすべてつぎ込んだ。完全に首が回らなくなり、雅恵が55歳にならんとするときに、腹黒い干は自ら命を絶ったという。一方、正妻は再婚して、子供がいよいよ現在も湖南省に住んでいる。

人民公社から文化大革命へ

さて、正妻によるいじめに雅恵が辛抱したのは1年足らずで終わったが、実はさらなる苦労が延々と雅恵の身の上へ続く。こんなことなら、「あのとき妹と一緒に帰っておけばよかった」と考える暇もないぐらいの労苦が待っていた。

八路軍による逮捕に際して干と別れた雅恵は、さらに奥の田舎に移動した。これは干の姉の主人が紹介してくれて可能になった。実をいうと、それ以外に選択の余地がなかったのである。

隣の村落に行くには山を一つも二つも越えていかなければならないような所であった。S県のY村に移って人々との交流に慣れてくると、周りの村民が独り者の雅恵を心配しはじめた。1950年、23歳のときに、雅恵は叶鵬伯という40歳の農民に嫁がされた。本妻の龍には子供がなく、子供を生んでくれそうな雅恵が来てくれたことを非常に喜んだ。農業を営むには働き手が多ければ多いほどよかったのである。

叶は俗にいう中農であったが、暮し向きは良くなかった。もっとも、当時の農村はどこも苦しい生活を強いられていたもので、富農といえども大変だったに違いない。貧農でなかったのが、せめてもの救いであった。もちろん、地主に雇われる雇農では嫁を貰えなかったから論外であるが。

雅恵は日が昇ると同時に起き出し、主人と本妻と3人で畑仕事に取り組んだ。それまで、農業などやったことのない雅恵には過酷そのものの労働であった。田んぼの草取りだけではない。収穫時には鎌で刈り取り、櫛に稲を通して籾を落とした。足踏み式の籾落とし機の利用は60年代になってからのことで、それまでは大変な力仕事であったと、雅恵は語る。棒で叩いて精米する作業も苦痛であった。茶作りもきつい仕事であった。お茶の葉を摘むのも重労働であったし、足で踏みつけ手で揉むのもきつい作業であった。

「お茶なんて汚いもんです。なに、知らなければ、楽しく飲めますが」

と雅恵はおもしろおかしく語ってくれた。

家畜の餌用の草を刈るため、山に行くのも過酷な仕事であった。赤細い唐辛子を栽培し、天日干しにして町へ担いで葉が売りに行った。また、サツマイモを担いで売りに行った。荷車はなく、1時間近く歩いた。売れたらお金がもらえ、売れ残ったら持って帰った。雅恵は叶からお金をもらえず、叶は死後、まったくお金を残さなかったと雅恵はいう。

それでも雅恵は徐々に農作業にも慣れ、生活が落ち着くと、本妻の遠慮もあり、雅恵は葉を独占するようになった。そして、3年の苦しい中でも楽しい夜を過ごした後、待望の男の子が生まれた。名前を果正とつけた。雅恵にとって最初の子供だが、不幸なことに母乳の出が非常に悪かった。

本妻も協力して米粒を臼で挽き、水に溶いて作った汁に砂糖を入れて飲ませた。雅恵はご飯にサツマイモ等、おかずをたくさん入れて食べたが、最後まで母乳の出は回復しなかった。果正はなんとか生き長らえたが、体の成長は芳しくなく、今でも47歳の同年の大人と比べて背が低い。雅恵は子供の世話、炊事、洗濯のため、農作業をあまりやらなくなった。叶夫妻も、金を払って他人に頼み、共同で作業をするようになった。昼ご飯は雅恵が用意し、叶宅に全員帰って食べ、また田畑に行くという毎日だった。

長男が生まれて二年ほど経った1955年、中国政府は残留日本人に帰国の機会を与えてくれた。しかも、政府が金を出してくれるという。雅恵は夫の許しを得て、S県の公安局へ行った。

「よかったですね、海雅英さん。子供さんは中国人だから同伴できませんが」

これを聞いて、雅恵はがっかりするとともに、決意を新たに中国で息子を立派に育てようと再出発する。その当時、海中雅恵は中国名で海雅英と呼ばれていた。

さらに4年が経過した1957年、2人目が生まれた。女の子で寧心と名づけた。叶の本妻は雅恵の2人の子、果正と寧心をかわいがり、姉のように優しく良い人だったという。赤ん坊の寧心にとって、さらに運の良いことに、雅恵は母乳が豊富に出た。ただ、食料事情が悪くなっていたため、まともな離乳食がなく、寧心は3歳になる1960年まで母乳を飲んでいたという。

これはまだ良かった。不運だったのは、この時期がいわゆる「大躍進」の真っ最中で、実現不可能な計画による犠牲が甚大だったことである。共産党の硬直な総路線が他の望ましい計画を採用させる柔軟性を失っていたのである。唯一順調なのは文字改革だったと言っても過言ではなかった。

1958年8月の鉄鋼増産決定による土法高炉では、鉄鋼を生産するどころか、人民の鉄製の生活用品を製鉄材料として消費しても碌な製品ができなかった。鍋、釜が見つかると、

「勝手に持っていかれました」

と、雅恵は言う。

燃料として山地の樹木を大々的に伐採した。このため、生活が原始社会に戻ったようなものだった。農業では稲の密植栽培という悲劇的な「まやかし」方針が打ち出された。幸い、雅恵の村では密植栽培が行われなかった。農村の人民公社化も同時に進行し、共産党指導による共同生活（共同食堂、共同作業）が行われた。個人の努力が報われないため、人々は働く意欲を失った。この結果、食糧の極端な不足を急速に引き起こし、非常に多くの餓死者を出した。これは毛沢東の政策の誤りだった。雅恵は、これについて、

「一説には、ソ連が借金を払わなくなったと言われた」

と話している。これは実際に流布された「公式」見解と一致している。

この極端な食糧不足は雅恵の家庭に深刻な影響を及ぼした。雅恵の村には高炉の建設がなく、農作業の人員に不足はなかったが、働く意欲の喪失はどうしようもなかった。全国的な飢饉に際して、雅恵たちは生のニンジンや生の大根を食べ、ドングリなどの木の実や木の皮を煮て食べた。大根、タマネギは火であぶって食べた。

大人たちより子供たちに食べられるものを優先的に回したため、まず本妻の龍が回復不可能なくらいに痩せこけて、1960年9月に餓死した。続いて、主人の叶鵬船が同年12月に餓死した。雅恵も手足が半分ほどに細くなり、顔がやせこけて眼球も飛び出したので、村の人に確実に死ぬだろうと言われた。

死の淵に立っていた雅恵に、運の女神が微笑みはじめた。個人の感情が政治の理性に打ち勝ちはじめたのである。1960年に入って人民公社が個人経営のレベルまで後戻りしはじめた。雅恵の話によると、

「20人くらいの共同生活は、1959～1960年の短い期間だけでした。その後、畑や土地を再び個人に分配すると、食糧生産が増えはじめました」

農民は集団農場から国家に製品を出荷するより、個人的な栽培や飼育に力を入れたのである。このようにして経済はゆっくりと回復に向かい、雅恵は餓死の淵から生還しはじめた。まさに奇跡であった。経済の回復が緩慢だったのは、もちろんこの年から始まった核開発に莫大な費用が回されたからである。

食糧事情の好転はスローペースだったので、しばらくの間、子供たちはカエルを食べて飢えをしをいだ。雅恵と二人の子はイナゴを捕まえ塩茹(ゆ)でして食べた。

「中国人はイナゴを食べる習慣がありませんでした」

と雅恵は言っている。

このおかげで、ささやかな動物性タンパク質に恵まれた。他に、サツマイモの蔓も塩茹でして食べた。

「中国人は大きい蟻を食べましたが、私たちは食べませんでした」

油はまったくなかったが、幸い米は少しあった。唯一の燃料は山の木だったが、雅恵の地方では土法高炉が建設されなかったため、豊富にあった。マッチは金を出せば買えたという。

1960年の末に、本妻の龍と主人の叶が相次いで亡くなった後、このように苦労が続きはしたが、徐々に軽減されていった。それでも、田植え、稲刈り、草刈り等は雅恵一人の肩にのしかかる非常に重荷であった。

「山での草刈りでは、直径数センチメートルの長いへビが怖かったです」

と雅恵は語っている。

畑の土は黄色粘土質で、乾くと硬いので、雅恵は耕すことを「土を割る」と説明してくれた。土の中に根を深く張る落花生はできないという。

葉が死亡すると、その兄弟の子供が雅恵を叩いて虐待した。また、

「カマ、ナタ、カゴを盗んだり、配給を横取りしたりしたのです」

と雅恵は言う。

雅恵は我慢した。雅恵の子供たちは日本鬼子と言われて見下され、雅恵は泣いてくやしがあった。幼子を抱え夫を亡くした雅恵は、できれば中国人と結婚したかった。しかし、時代がそうさせてくれなかったのだ。これから文化大革命に走らんとする中国で、日本人と結婚する酔狂者はいなかった。

1962年に9歳になった息子の叶果正が、学校に行かないで農作業を手伝ってくれた。特に、田植えの手伝いは雅恵にとってありがたかった。田んぼでは、たくさんの蛭が足に吸い付き血を吸う。また、蚊がうようよと押し寄せてくるため、皮膚の弱い雅恵にとって最も苦手な作業だったからである。結局、息子の果正は小学校4年までしか学校に行けなかった。これが後々、兄妹間のいがみ合いのもとになっていく。

さらに2年経過して、7歳の寧心も母と兄の農作業を手伝うようになった。しかし、もともと栄養不良の幼女が病気にかかるのも早かった。虫にさされて、頭に直径5センチの出来物ができ、「膿^{うみ}がたまり、悪化して骨が見え、洗っても洗ってもウジがわいたのです」

と雅恵は説明してくれた。

お金を工面して、やっと医者にかかっても、汚いからあっちへ行けと言われ、看護婦に治療してもらいありさまだった。9歳になってやっと治り、さらに二年過ぎた11歳のとき、寧心は初めて小学校に通えるようになった。雅恵に似て、もともと利発な女の子だったので学習速度が速く、先生を驚かせたという。その後、学校を休んで農作業に打ち込んだりしながら、20歳で高等学校を卒業した。彼女は43歳になる今でも、出来物が治ったあとに残った大きなハゲを長い髪で隠している。

娘の寧心が12～13歳頃の話である。50キログラムもの麦藁を担いで紙工場へ運ぶ途中、

転んで起き上がれず、泣いたことがあった。

「小さい子供になんてひどいことを。親の顔が見たいもんだ」

と言われた。寧心は幼い頃の栄養不足で背も並み以下だったのだ。麦藁は雨に濡れると非常に重く、大変な重労働だったという。石炭、木炭等の燃料を買う金がなく、主として寧心が歩いて10分くらいの山へ行き、ナタで木を切って運び、燃料用に薪を用意した。暑い夏も、寒い冬も、雨が降っても、雪が降っても、このような重労働が繰り返された。

「夕方暗くなると、私も土手で薪を担いだまま転げ落ちたこともありました」

と、雅恵はおもしろおかしく語っている。

米以外に、野菜を栽培した。大根、麦、サツマイモ、ソバなどである。現金は、米や鶏の卵を売って得た。30～40羽の鶏を飼っていたが、餌は米だったので、もったいなくて、あまり多く飼えなかったという。

1980年までは、このように赤貧を洗うような生活だった。着るものも少なく、綿を紡いで糸を作り、布に織ってもらった。これを鍋で黒く染めてから服を作った。Y村の他の家族も、雅恵の家ほどでないにしても、似たような貧乏暮らしだったと語っている。雅恵はため息をつきながら、小さい声をもらした。

「60年間楽しいことは一つもありませんでした」

子供たちの独立

寧心は成績が良く、先生の推薦を得て高校まで進み、皆勤賞をもらったと雅恵は誇らしげに語っている。彼女は高校の3年間、朝6時に起き、2時間以上かけて登校した。帰りは真っ暗になっていた。弁当はほとんど作ってもらえず、1日を2食で過ごした。学校に行っている間、寧心は農作業に従事できないため、母と息子の働きだけでは稼げる米の量が少なく、彼女の昼食を抜いたのだった。もちろん、妹の寧心が兄の果正に遠慮したということもあった。

「妹は働かない」

と不満をいう兄に対し、妹は決して口答えしなかった。中学時代は学校が近く、帰ると直ぐに農作業を手伝っていた。しかし、高校に行ってから手伝いができず、兄に対して申し訳なく思った。と同時に、兄への反感をつのらせていったのである。

小学校入学が11歳と遅かった影響と経済問題のため、寧心は高校を20歳で卒業した。彼女は成績が良く、外国人(日本人)の血を引いているということで、農民以外の仕事をもらった。鉾山食堂での調理ということであった。

雅恵には、息子を学校に充分通わせられなかったことに対する負い目があったのであろう。この仕事を息子の果正に譲らせたのである。後で、寧心はそのことを後悔することになる。

現在でもそうだが、中国では、職業を変更したり、他の地方に移住したりする自由は原則としてないのである。この鉾山で金を産出すると、雅恵は言う。自宅からはバスを乗り継いで三時間以上のところにあり、毎日の通勤が不可能なので、叶果正は一人で住み込むそうである。帰宅は月に1回で1週間休暇をとるといふ。

寧心は非農業の職を兄に譲った後、栽培きのこを集荷して販売する会社で働くようになった。そして、1980年に兄の果正が王悠蓮と結婚して間もなく、同じ年に妹の寧心も23歳で金建生と結婚した。そして夫の農業を手伝いはじめた。きつい仕事であることは充分以上に承知していたが、食堂の仕事を兄に譲り渡した今となっては、農業以外の選択肢はなかった。ここが、先ほど説明した後悔を生み出したのである。

息子の結婚は雅恵にささやかな幸せを運んでくれた。彼女は、嫁の王悠蓮に農業を任せ、50歳代前半できつい農作業をやめた。近くの畑で野菜を作り、収穫時に稲刈りを手伝う程度だった。そして家事を嫁から任された。娘が結婚すると、息子の家から30分以上歩いて、婿である金建生の家に行き、そこでも家事を手伝ったのである。

結婚の翌年1981年には、果正に長女が生まれ、銀紅と名づけられた。そして、雅恵の仕事が一つ増えたのである。王悠蓮が農作業している間、銀紅を紐で背中に負ぶって面倒を見た。負ぶい紐は中国にはなく、

「中国人は籠に入れて地面に置き、あやしていました」

と、雅恵は懐かしそうに語ってくれた。

1983年には、娘の寧心にも待望の赤ん坊が生まれた。華月と名づけた。息子に銀紅という女の子が生まれたときと同様、娘の赤子の面倒も雅恵の仕事になった。雅恵にとって孫をあやすことは楽しい仕事だったが、息子の果正にとってはおもしろくないことだった。ろくに小学校にも通わせてもらえなかった恨みが、再び持ち上がったのである。

「おっかあ、妹の赤子ばかり面倒見ずに、銀紅をしっかり見ててくれ」

と文句を言うようになった。

そこで、雅恵は一時間近く山間の畦道を通り、木の下をくぐり、2人の家を行ったり来たりした。

「これもしんどかったけど、楽しいことでした」

と雅恵は語っている。と同時に、寧心宅で家事をサボっていると、

「お母さん、ちゃんと働いてよ。兄さん宅ではちゃんと仕事するんでしょ」

と娘に叱られる始末だった。

1985年、息子の果正に2人目の子が生まれた。男の子で、群と名づけられた。同じ年、娘の寧心に2人目の娘、光月が、その2年後に長男が、さらに1年後の1988年には、4人目で次男の威生が生まれた。この出産ラッシュは両家にとって大きな経済負担になった。そして長男は生まれて間もなく養子に出した。

「養育にかかる費用よりも、一時的に払った罰金のほうが重荷でした」

と、雅恵は語っている。これは一人っ子政策によるもので、2人目の子供を産むことはできるが、莫大な罰金を払わされるのである。1979年に始まったこの政策が、運悪く息子と娘それぞれの2人目以降の子供に及んだのだった。

果正は三人目以降を作る余裕がないので、不妊手術に踏みきった。この手術のほうが罰金より安いのである。一方、寧心は経済的手腕に優れ、雑収入も少しあったので、4人目を身ごもった。しかし、そこまでが手一杯で、輸卵管結紮手術を受けたのである。

寧心に子供が多いのは、上に述べた理由以外に、生まれた子供に政府から畑を追加してもらえるということもあった。その広さは、ちょっとしたマンション1軒の床面積くらいある。

1980年代は雅恵にとって楽しみが一つ二つ増えた時期だったが、経済的な苦しみが消えたわけではなかった。家は相変わらず昔のままで、粘土質の土で作った「土壁の家」に変わりはない。床は土間で、外部と地続きになっている。しかし、掃除には便利で、ゴミを簡単に箒で掃き出すことができる。雅恵によると、

「家の外回りはいつも汚く、たまったゴミを時々燃やして見映えをよくします」

という。一方、娘と主人(金建生)の家は少しましで、レンガ作りの家だという。

念願叶って日本へ

雅恵が50歳代に入り、息子も20代半ばで生活もそこそこ安定してくると、雅恵は望郷の念が徐々に高まっていった。そして1980年に帰国手続きに入った。これは、同年帰国した従弟のM氏からの強い誘いがあったからのことで、自発的ではなかったようだ。終戦直後に、妹や母と一緒に帰らなかった経緯を思い出して、躊躇していたのである。

この従弟は、軍人の父を亡くした後、厚生省(現在の厚生労働省)による残留孤児調査が始まる直前の1980年1月に帰国していた。その数年前には、田中角栄訪中による国交回復を受けて、残留邦人の調査が始まっていた。そして、中国東北地方にいたM氏は、雅恵が湖南省に居ることを厚生省から知らされ、手紙を出していた。この従弟は亡父の兄の長女である雅恵を前々から気にかけていたので、彼女に帰国を促すために連絡したのである。

M氏は雅恵の身元引受人としてビザ申請書を作成し、外務省(の在中公館)に帰国願いを出してくれた。もちろん、拒否する理由は何もないので、スムーズに手続きは進行するはずだった。

息子の果正と娘の寧心は、汽車で一日かけてS県から湖南省省都の長沙へ行き、旅券も申請した。手続きは寧心がすべて行った。雅恵も長男も中国語を話せるが、書くのが苦手で、それになにより、学歴の高い長女に任せておけば安心だったのである。学歴が低いのは農村において一般的なことで、農作業を手伝うため学校になかなか通えないのだ。息子の果正はまさにこのケースに当てはまる。

帰国手続きが始まってからしばらくして、長男は王悠蓮と結婚した。低学歴のため、母だけでなく妻も養うのに十分な収入が日本では得られないと悩んだのである。

「おっかあ、おれ日本へ行くのやめるよ。悠蓮を幸せにする自信がない」

母雅恵はこの発言を聞いて帰国を断念せざるを得なかった。果正を置き去りにして帰国する度胸はなかった。それに、費用不足で旅券を取得することが出来なくなっていたのだ。現在でもそうだが、賄賂が幅を利かす社会で、これを工面する余裕がなかったのである。長女寧心も兄の言うことに従わざるを得なかった。そして23歳の彼女も、同じ1980年に金建生と結婚した。

一方、帰国して中部地方に落ち着いていた従弟のM氏は雅恵の住むアパートも用意し、家具も整えて雅恵の帰りを待っていた。県からの帰国祝い金が雅恵に贈られたことを知り、安堵の胸をなでおろして今日か明日かと到着を待ちわびていた。何週間経っても雅恵は姿を現さない。怒り心頭に発せんとした矢先、一通の詫言状が雅恵から届いた。

「ほんとに、もおしわけありません。帰国できなくなりました。雅恵より」

と、一行書いてあるだけであつた。従弟の面子が丸つぶれである。

「県や国に申し訳ない」

と、昔気質^{かたぎ}の従弟は恐縮する一方で、この怒りをぶつける相手がいなかった。この憤怒を20年後に、雅恵の身元引受人の牟田にぶつけようとは誰も想像できない運命のいたずらであつた。

こうして、さらに17年の歳月が流れて行く。このまま中国に骨を埋めるしかないと考えていた雅恵に、思わぬ展開が待ち受けていた。

1996年末のこと、湖南省のS市が村の近くにあり、雅恵は時々バスに乗って訪れていた。この人口32万の都市で中国婦人に日本語を教えていた。ある日、30代後半と思われる男が雅恵に日本のことを訊きにやってくると言った。

「あなたが海中さんですか。私はあなたの息子さんの友達で、李修民と言います」

雅恵の姓は海中という。しかし、彼女には李という名に聞き覚えがなかった。自宅に戻ったとき、息子に訊いてみると、

「そいつ、この前、職場にやってきたよ。俺に母さんのことを訊いていたぜ」

と答えてくれた。別に友達でもなさそうであった。

そのまま気に留めず数週間が過ぎていった。そして、ある日曜日、李が自宅にやってきた。たくさんの手土産を持って、

「おばさん、これ福建省の特産です。飲んでください」

と、雅恵にいろいろな漢方薬をくれた。息子の果正に腕時計、嫁の王悠蓮に食器、孫娘の銀紅には化粧道具、そして孫息子の群には万年筆を持ってきた。雅恵は喜び、果正に言った。

「おまえは、ほんとに良い友人に恵まれているよ」

30分ほど世間話をした後、李が話題を変えた。

「おばさん、日本は戦争に負けたけど、今は一等国になったそうですね」

雅恵はこれを聞いてうれしくなった。40年前に息子と娘が小日本鬼と、ばかにされた悔しさを忘れ、60年前の東京を懐かしみながら、

「日本のことよく知っているね。行ったことがあるの」

と訊いた。すると、

「いえ、ないです。従弟が8年間、日本に留学していて、今年帰国しました。彼から話をいろいろ聞きました。日本は良い国だと思います。行ってみたいです」

中国から海外へ行く正規の方法は、留学か派遣のどちらかである。どちらも、一般的ではないし、家族全員で行けるわけではない。一家揃って行くには、密航しかないのである。李修民は、このことを承知しながら、「(日本へ)行ってみたいです」と雅恵に話しかけたのだ。

雅恵は17年前のことを思い出した。

「あのとき日本に帰っていたら、今ごろ一等国で生活が楽になっていたのに」

と心の中で残念に思ったのである。帰国を断念した裏には、息子果正の反対以外に、帰国費用の工面がつかないという実情もあった。しかし、厚生省は、

「そんなはずはない、旅費が出ることは事前に通知済みです」

と断言する。

雅恵の家族はそのことを正しく理解していた。その前に立ちはだかった大問題があったのである。それは旅券取得にかかる費用であった。日本ではすべての人が同じ料金、同じ日数で旅券が比較的早く取れる。しかし、中国では、袖の下が昔も今も有効で、賄賂を出さなければ、旅券取得が非常に遅れるのである。雅恵にはその金の工面ができなかった。もちろん、旅券のために泊りがけで省都まで何回も出かける余裕は、時間的にも、金銭的にもなかった。もう一つの大問題は、帰国後の生活費であった。生活保護という制度は中国にないから、職もなしに日本で生活できるなど信じられなかったのである。

李が本音を隠して親切に切り出した。

「おばさん、日本に帰りたいでしょう。帰国費用は全部私が出します」

雅恵は自分の耳を疑った。そんなうまい話が……と考える間もなく、李が続けて、
「帰国費用は果正さんが帰国後に働いて、収入を得たとき返してもらいます」

なるほど、そういうことか、後で倍にして返させるのだろうと不安がよぎった。それでも、日本の土を再び踏める……、その誘惑に負け、
「息子がいいと言うんだったら、私も賛成するよ」

と返事した。これが後での後悔につながるのだが、雅恵はまだ息子と友人の間の裏取引などに気づいていない。アルコールに弱い李は、中国の強い酒をなめるように味わって、そのまま三台並べた椅子の上に寝込んでしまった。湖南省は南の地方とはいえ、秋も終わりに近く、夜は冷える。翌朝、ぶるぶると震えながらも、彼は機嫌よく起き上がり、
「じゃ、おばさん、日本の政府との連絡も私のほうでやります」

と言って、立ち去って行った。

この日、李はS県からバスに20分ほど乗ってS市まで行った(著者註:中国では県は市より下位にある)。彼は福建省で商売を営んでおり、周りの省に頻繁に出かけて商品の購入や販売をやっていたようである。住居は都会にあり、妻と2人の子供がいる。

この都会のF市は州政府が所在する省都ほど大きくはないが、名の知れたところである。F市からは密航者が数多く出ており、海外に出て成功した一族でなければ肩身が狭い所だと、牟田不作は後で知った。

S市で、李は、かねてから別の日本婦人の家に連絡をつけ、金品を贈って歓心を得ていた。バスを降りたあと、そこへ直行した。挨拶もそこそこに、李は、
「雅恵さんが日本へ帰る決心をしました。厚生省へ連絡をお願いします」

と声も弾まんばかりに、山元^{やまもと}へ伝えた。この人は、1974年に湖南省S市から帰国した残留婦人で、20年間ほど東京で働いたあと、中国人の夫とともにこの都市に戻っていた。雅恵より少し年下の女性である。

雅恵は1974年までこの婦人と面識はなかったが、他に2人の残留婦人とは親しく交際していた。1978年に日中平和友好条約の調印後、この2人も70年代終わりに家族ともども帰国している。うち1人は日本の女学校出身で、国民党将校の軍医と結婚して、S市近くの田舎に住んでいた。その後、S市の大学に招聘されたと、雅恵は語っている。この二人とたまに会っていたが、雅恵は、
「中国にいる他の日本人は心が合わない。親切でなかった」

と話している。

さて、李の話を聞いた山元は、
「それはよかった。従弟のM氏にすぐに手紙を書きましょう」

とすばやく反応した。雅恵の楽ではない生活を直接に聞いていたからである。

このように、半年も経たないうちに、ここまで進んだ雅恵帰国の話は、さらに加速度を上げて進行することになる。

17年前の怒りを脇において、雅恵の従弟のM氏も雅恵の戸籍謄本を取り、厚生省に連絡を取りはじめた。そして、1997年8月には厚生大臣小泉純一郎の名で、永住帰国旅費支給決定書が出た。S市から上海までの汽車賃、6万円弱と航空券の交付に対するものであった。所沢の中国帰国者定着促進センターへの入所期間も、同年10月から1998年1月までと決まった。

一方、雅恵の外国人出入国証も1997年9月に出た。あとは、子供と孫の中国人としての旅券である。これも李修民の資金の豊富さからいえば、取得に一カ月もかかるはずがない。この地方では、1万元(10数万円)もあれば楽に旅券が取れる。ところが、このとき雅恵が関知しないところで、大きな波が立ちはじめたのである。

次の段階に向けて、李はまず自分たち家族6人分の常住人口登記票を、同じ9月に作成した。これは、叶果正の登記票とそっくり似せてあった。叶果正の家族は4人、つまり夫妻と子供2人である。その戸籍のうち子供2人を李修民家族の子供2人に入れ替え、さらに2人の子供を付け加えた。

この登記票で、夫妻は叶果正夫妻のまま変更していない。日本では不可能だが、ここでは地獄の沙汰も金次第のようである。この不正ではあるが、正規の登記票を持って、李はS市の公安局へ行った。これで、家族6人分の旅券が手に入ると思い、ぞくぞくするほど身が震えてきた。

ところが、運の悪いことに、担当官は叶果正の顔を見覚えていたのである。

「この旅券申請書の顔写真は叶果正のものじゃないな。これではだめだ」

と却下されてしまった。李は慌てた。しかし、落ち着きを取り戻すと、彼は的確な判断を下した。

「公安局から旅券をもらうには、偽者では駄目で、本人が出向くしかない」

何日か新しい計画を考えたあと、果正のところへ相談に行った。

「ちょっと面倒なことになったぜ」

これに対し、叶果正は

「旅券なんか直ぐ取れるだろう。何が問題だよ」

「そりゃ、おまえの旅券なんか直ぐ取れるさ。その後が問題なんだよ」

果正には問題が複雑すぎて理解できなかった。李が続けて、

「いいか、日本へ行くのは俺なんだぞ。名前はお前の名前のままでいいよ。顔はどうするんだよ」

そう説明しても、雅恵の長男には問題が何なのか読めない。

「お前と俺は、全然似てないんだぜ。お前の旅券のままで出国できると思うか」

やっと理解できた果正が言った。

「そりゃそうだ。誰が見たって直ぐわかるよ。おまえとおれと顔が違いすぎるね」

この新しい計画では、まず叶果正家族四人分の正規の旅券を取り、写真を叶の家族から李の家族へ貼り替える。正規の旅券の取得自体は問題ない。しかし、先日の不正申請が却下されたばかりで、今すぐ正規旅券を取り直すのは危険である。そこで、李は根回しからはじめた。なんと、公安局長を買収しようとした。かなりの金銭を用意したが、この人物は堅物で失敗に終わった。局長いわく、

「おまえは湖南省の人間じゃないから駄目だ」

ということだった。

李修民は、賢いことに、ここでいったん引き下がった。この押しと引きのタイミングは見事なものである。福建省から始めた商売を広げた経験が役に立ったのだ。

もちろん、彼は日本に対して根回しは役に立たず、また不要であることも知っていた。厚生省には、帰国を延期したい旨の通知をいっさい入れなかった。案の定、厚生省も知らんぷりを決め込んでいたようである。仕事が忙しく、残留邦人の個々のケースの進行にまでは目が行き届かなかったのであろう。この後、雅恵と長男一家の帰国手続きが停止したまま、却下されずに10カ月間

の沈黙が過ぎていく。

この長い期間は、李にとって大切なものであった。S市の公安局の堅物が転勤するのをじっと待っていたのだ。この堅物の買収に失敗したあと、直ちにS市の市長に対して賄賂攻勢をしておいたのである。李は聡明だった。旅券を取得するには、この堅物が邪魔になると正しく理解した。この人物の移動を市長に頼んだというわけである。日本人にはできない、いや考え及ばないしぶとさである。

ここで彼らの家族構成を整理しておこう。叶家族は、親2人子供2人の合計4人家族である。これに対して、李家族は6人である。先に説明したように、役所の係員を買収して、戸籍は4人から6人に増やしてある。写真を必要としないので、この手続きは楽だった。理解をさらに深めるために、これら2家族の家系図を書いておこう。

海中雅恵（残留婦人）の長男家族

本物 叶果正（実子 47）——叶銀紅（長女 19）／叶群（長男 15）王悠蓮（妻 46）
偽物 李修民（偽子 40）——李芬（兄の娘 22）／李明成（兄の息子 18）
徐麗青（妻 38）／李冰冰（長女 14）／李真真（次男 11）

先に書いたのが雅恵直属の本物で、後に着いたのが偽者である。形の上では、叶が自分の4人家族の旅券を李に売ったことになる。本物の孫娘と孫息子は、李直属の長女と次男より年齢がかなり上である。だから、李は自分の兄の子を2人借りてきて、つじつまを合わせたのだ。もともと李は4人家族だから、本物の4人を偽物の4人とそっくり入れ替えれば、話は簡単だった。しかし、年齢と学年差が大きすぎたのである。

1998年も明けて、李はかねてからの計画を実行に移した。7月に雅恵の長男家族4人分の正規旅券を取得した。このとき、李自身は行かず、用意周到に長男果正を公安局へ行かせた。もちろん、あの堅物局長は転勤していた。そして、金をたっぷり出して旅券取得を早めたのである。

この旅券の写真を叶家族から李家族へ貼り替えるのが難題であった。国内ではできず、外国に持ち込んで行うのである。これには、かなりの時間と金銭をかけて乗り切ることにした。追加した子供2人の旅券には張替問題がないので、帰国直前に取得することに決めた。これ以後も、李は慎重に事を運んでいく。

李は賢明であり、決断が的確であった。家族六人分の旅券取得のめどが立つと、前述の10カ月間の沈黙を破り、厚生省への連絡を突然再開した。そして、旅券取得前の6月には、厚生省へ帰国延期を要請するFAXを打った。和訳を要約すると、以下のようなになる。

昨年8月某日、永住帰国の許可をいただきました。ところが、母親がこれに興奮し、悪かった心臓病を再発させ入院治療に専念せざるを得ず、定められた期間内に帰国できませんでした。快復し退院しましたが、医者からは、母親をゆっくり休ませなさいと言われていています。この後も期日どおりに帰国できない恐れがあります。定着促進センターに入所せずに帰国する方法がないでしょうか。

李は中国人である。日本人が行うような詫びは一切表明していない。センター入所を回避する手法を考え出している。これだと、人知れず安全に日本定住が始められると考えたのであろう。心臓病は一般にあてはまる便利な病名である。実際のところ、雅恵は入院していなかったが、厚生省は知る由もない。

このFAX要請に対して、厚生省は直ちに親切に応答した。同じ1998年の翌月(7月)には手紙を送り、再調整が必要だから、希望帰国定居調査表を再度提出するよう要請している。そして、時間をかけて、母親である雅恵の体調をうかがいながら、帰国日程を決めましようとも書いてあった。

この手紙には、もう一つ重要なことがあった。従弟のM氏が身元引受人から降りるという内容である。M氏は17年前に雅恵の突然帰国中止で面子を失っており、再度帰国を中止されてはたまらないと思ったのだ。これは李にとって歓迎すべきことであった。帰国したときに、偽の息子ということが露見する心配がひとつ減ることになるからであった。

ここで、李は慎重に事を運ぶ。改竄^{かいざん}旅券がまだ届いていない。これはいいとして、残り2人の子供は実際の叶果正の家族に存在しないため、新たにする必要がある。これ自体は金を出せば簡単なことである。しかし、取得日付が、先に提出した4人の改竄旅券と違って来る。そこで、翌8月に入り、先ほどの希望帰国定居調査表を提出する際に、残りの二人の子供をはずした。

これには李の深い考えがこめられていた。つまり、母親(雅恵)と息子(偽者、つまり李修民)の家族四人、合計5人だけが先に帰国し、あとから末の子供2人(雅恵から見て偽の孫たち)を呼び寄せるという計画である。これだと、旅券取得日付の不整合は問題にならない。

李の調査表提出を受けて、厚生省は1999年3月に、またまた親切な忠告を与えてくれた。「先に帰国する5人には国の費用が出ますが、あとの人は自費で帰国して下さい」

李はこれを見て、少し驚くが、にんまりと微笑んだ。「こんな親切な、すばらしい国に行ける俺は、なんて幸せ者だろう」

そして、絶対に日本行きを成功させると彼は誓ったのである。直ちに、下の2人の子供を同伴帰国させる旨のFAXを厚生省宛てに打った。

翌月の4月には、厚生省から末の2人が追加されたと通知が来た。同時に、新しい身元引受人が、牟田不作に決まった旨の連絡も入った。帰国後の住所も神奈川県に決まった。

「よかった。これで中部地方の雅恵の親類から逃れられる」

と李は安堵の胸をなで下ろした。彼が一番恐れたのは親類と会うことだったからである。今までほとんど音信もなく、日本にいる親類は、雅恵の子供や孫を知らないとはいえ、できれば避けたかったのが本心であった。

次に、李が行ったことは、最後の二人、叶冰冰と叶真真の旅券の取得であった。これは偽戸籍上の名前であり、もちろん実名は李冰冰と李真真である。

この旅券は四月の末に取ることができた。6月には定着促進センターへの入所期日も変更決定された。2000年2月18日～6月1日となっており、1997年10月～1998年1月からの変更である。

ここに至るまで3年近くかかった。費やした金額も、日本円に換算して百五十万円を大きく超えていた。中国では立派な家を建て、一生楽に生活できる金額である。それでも李は満足であった。日本で就職できれば、この程度のお金はすぐ稼ぎ返せることが、いろいろな情報から分かっていたからである。

話は飛ぶが、厚生省への連絡は、それまで主として雅恵の友人である山元がやっていた。李が直接厚生省へ連絡するようになると、この女性は彼の悪巧みを知るようになった。そして、結局は連絡係を辞めてしまった。同時に、雅恵も息子の裏取引を知るようになったが、既にそれを止める

だけの気力はなかった。

そのあと、李は1998年6月の厚生省へのFAXで、連絡係を廖青へ変更している。李はこの女性にかなりの金額を支払った。李がこの人を選んだのは、廖の兄が東京におり、就職も世話してもらえると聞いたからである。このように的確な人選ができたのも、李の高い商才のおかげであろう。

連絡係は厚生省や身元引受人からの手紙を受け取る役を請け負っていた。手紙が雅恵の所に直接届くと、連絡が遅れたり、李に届かなかったりする可能性があるからだ。もちろん、雅恵に直接届いて不都合なことが生じる可能性を避けるためでもあった。実に、用意周到であった。

李修民には、しなければならない重要な事柄が一つ残っていた。偽家族が仲良く日本で暮らすための訓練である。突然同居を始めても、赤の他人との生活はぎこちないに違いない。これでは、偽者であることがバレてしまう。そこで、1999年5月から10月まで、嫌がる雅恵を福建省の李の自宅へ強制的に連れて行った。そこで、家族として一緒に暮らす訓練を行ったのである。

これだけでは充分でないと李は考えたのであろう。さらに、10月から2000年2月の日本行き直前まで、李一家は湖南省S市の廖青の家で生活した。これは、湖南語を身につけるのが目的であった。出国時に空港で税関の職員に不審感を抱かせないためだった。また、日本の定着センターで他の帰国者や職員に怪しまれないようにするためでもあった。

中国は広い国で、同じ漢字でも地方によって発音が大きく異なる。つまり、方言の差が非常に大きいのである。李家族が福建語でしゃべると、雅恵はまったく理解できなかった。だから、聞かれると都合が悪いとき、李は福建語を使った。

さらに、用意周到にも、日本への出発地を北京から上海に変更してもらった。湖南省からは中国国内の規定として、北京から日本に行くことになっている。これも賄賂攻勢で上海からに変更させてしまったのである。理由は単純である。北京には数多くの孤児家族が同じ便でまとまって来日することになっている。これを李修民は嫌ったのだ。偽親子関係がばれる機会を極力減らしたかったのである。

さて、ここまでくれば、もう何も不安はない。李は堂々と日本の国費で来日する。2000年2月6日、雅恵と李一家の計7人、それに雅恵の実息子一家四人が、S市の駅を汽車で長沙へ出発したのである。ここで、3泊4日過ごして国際予防接種を受け、健康証明書を発行してもらった。

本物の息子一家はここで別れて、汽車で南へ下り湖南省のH市へ向かった。この都市にある李の妻の実家へ居候するためである。日本へ行くはずの家族がS県に留まっては不都合なので、このように複雑なことをしたのだ。もちろん、雅恵の長男家族を監視することも隠れた目的であった。密告を恐れたのである。

一方、雅恵と李一家、つまり偽の雅恵家族は、さらに汽車で上海へ向かった。2月10日のことであった。この中国第二の都市にある日本領事館で帰国手続きを取ったあと、上海見物をして過ごした。李民芬は恋人と別れを惜しんだ。何年か経てば会えると分かっているけど、別れは辛いものであった。

2月18日に空路成田へ到着である。ここで北京経由で来た10数家族と合流し、バスで埼玉県所沢市の定着促進センターへ行った。到着すると、李はどっと疲れが出て、翌日は一日中寝ていた。緊張から解放された喜びは格別であった。雅恵も六十年ぶりの祖国に涙ぐんだ。

後編 日本へ

後編「日本へ」は身元引受人の体験に基づく物語である。当初、彼は前編に描かれた雅恵の歴史をまったく知らなかった。海中雅恵の苦悩が2000年2月から2001年2月まで徐々に現れ、急激に消えてゆく。

歓迎されない帰国者

中国帰国者定着促進センターは埼玉県所沢市にあり、東京都と近接している。米軍通信基地、航空記念公園という2つの超広大空間に隣接した文教地区にある。もともと軍関連の施設があったところのようで、南隣には防衛医科大学校もある。北側に隣接して小学校と中学校がある。付近で休んでいると、ここだけはゆったり時間が流れているような錯覚に陥るくらい落ち着くところである。

2000年2月18日に雅恵と叶果正家族(この時点で、身元引受人である牟田不作は、前編の物語をまったく知らず、偽家族にも気づいていなかった。李修民の代りに叶果正と呼ぶ)が到着したとき、既にサハリンから一世帯、カザフスタンから一世帯が来日していた。これは、色々な事情で邦人が戦後広く散らばっていったことの証である。雅恵たちも含めて、中国からの帰国者16世帯81名が同じ日に来日した。日本語その他の授業が始まる2月25日まで、叶一家は早速付近を歩き回った。驚きの連続である。

「きれいな所だね。ゴミひとつ落ちていないよ」

「父さん、あっちに何か大きいものがたくさんあるよ」

行ってみると、テレビ、タンス、CDプレーヤーなど、まだ使えそうなものが捨てられていた。すべて拾い集め、手分けして持ち帰った。授業が始まると、土曜、日曜ごとに遠くまで散歩に行き、さらに拾得物が増えて行った。

こんなにたくさんの荷物をどこにしまうのであろうか。その心配は無用である。センターの建物は1984年設立以降の帰国ラッシュに合わせて、最高56世帯まで対応できる大きさに増築されている。今回の第61期のように18世帯しかいないと、部屋が数多く余る。雅恵たちは、7人で3世帯分の3部屋をあてがわれていた。だから、大きなタンスを2棹も3棹も収容できるのである。

4月に入り暖かくなると、叶果正は足をさらに延ばした。駅前広場で毎日曜日に行われる蚤の市で掘り出し物を格安で手に入れることを覚えたのである。センターから出るいろいろな手当を工面してお金を作り、毎週買いためていった。

もちろん、ただで拾えるものは何でも持ち帰った。使い古しの電池も何十個と拾い集めた。茶碗、箸、湯呑、皿、その他ありとあらゆる食器類をかき集めた。傘つき電灯を5本揃え、電気ポットも7台用意した。電気炊飯器に至っては10台以上集めている。電話機も15台以上取り揃えた。今では見向きもされない、大きなステレオ・セットも2組、安く購入した。大きいものでは、タンス2棹、ベッド2台を用意した。これらはすべて、2月18日から5月31日までの3カ月半でかき集めたのである。

これは叶一家だけのことではない。他の家族も、叶家族ほどでないにしても、似たり寄ったりであった。なぜこんなに多くの家財道具を、叶果正が収集したのか、いずれ明らかになる。

集めたのは家財だけではなかった。所沢で、こちらのスーパーで大安売りがあると聞くと、叶一家全員で出かけて小麦粉一キロ袋を多数買いあさり、30キログラムも揃えた。あちらのスーパーのチラシを見つけると、醤油も出血サービスのたびに買い求め、食用油を何十本も用意した。

3月に入ると、身元引受人の牟田が雅恵一家との面会の日程を決め、3月末に所沢訪問となった。平日の午後には訪問すると、叶家族は研修棟で日本語の勉強をしていた。雅恵は足が悪く歩行困難のため宿泊棟で勉強していた。嫁の王悠蓮(実際は徐麗青だが、牟田はまだ気づいていない)は雅恵の世話をするため、同様に宿泊棟で学んでいた。雅恵と嫁を研修棟に車で送ってもらい、そこで七人と面談したのである。

牟田は彼らと会見して、奇妙なことに気づいた。それは雅恵と叶たちとの間に大きな溝が見え隠れしていたことである。牟田はこのとき、国が違っても、嫁と姑との戦いは熾烈だなと感じ、中国で一緒に暮らしていたとは思えなかった。おそらく別居していて日本で急に同居をはじめたものだから、ぎこちなさがあるのだと想像した。

このとき初めて、牟田は雅恵の従弟のM氏が中部地方に住んでいて、雅恵の唯一の親類だと聞かされた。そして、そこに父親の墓があり、お参りしたいと雅恵は小さな声で言った。牟田は願いを叶えてあげましょうと彼女に約束したのである。

4月に入って、牟田は約束どおり墓参りのことで所沢に電話をかけた。そして、暖かくなる月末に、雅恵と叶夫妻の4人で墓参りすることが決まった。牟田はその夜、中部地方に住んでいるという雅恵の従弟に電話した。

「もしもし、^{うみなか}海中さんのお宅でしょうか」

「はいそうですが、^{うみなか}ではなく、^{かいなか}かです」

名前にはいろんな読み方があるものだと、牟田は思った。しかし、雅恵は確か「うみなか」というのでなかったかと、少々不思議には思った。

「私は雅恵さんの身元引受人の牟田です。雅恵さんの墓参りに案内していただけないでしょうか」

と申し出ると、意外にも、M氏の返事は冷めたものだった。

「雅恵さんの父親の墓は、あそこにはありません」

牟田が、それを理解できないでいると、M氏は続けて、

「北海道にあります。今は、あそこの墓に訪問するのは不可能でしょう」

これも牟田には不可解なことであった。実はこのとき、牟田は知らなかったが、雅恵の父親の墓は、雅恵の継母と妹が、継母の郷里の北海道に作っていたのだ。

M氏はさらに続けて言った。

「雅恵さんの従姉の英子さんなら、本家の墓に案内してくれるかもしれません」

英子という女性は、雅恵の父の兄の子である。牟田は、この人の電話番号を教わり、電話した。

「M氏から紹介された牟田です。恐れ入りますが、^{かいなか}海中本家の墓に雅恵さんを参らせていただけないでしょうか」

「それは、ちょっとまずいですね。雅恵さんの父親のお墓ではないですからね」

「そこをなんとか、先祖の墓ということで、ご無理願えないでしょうか」

「私には決められません。本家の長男に訊いてみて下さい」

牟田は、たらい回しにあったような感じがして、本家への電話は次の日に延ばした。

「襖英子さんに紹介いただいた牟田でございます。本家のお墓に雅恵さんを参らせていただけないでしょうか」

「けっこうです。4月29日にいらしてください」

やっと許可がおりた。本家の長男に、わだかまりはなかったようである。

当日、牟田は所沢へ雅恵を迎えに行き、高速道路で中部地方へ向かった。叶果正夫妻も一緒である。途中、雅恵に名前の読み方を尋ねた。

「M氏に電話しました。彼は海中の正しい読み方を教えてくれました」

すると、雅恵は、

「中国へ渡ってから、父が読み方をうみなかに変えたのです」

と答えた。

牟田はこのときは、そんなこともあるのかと、あまり深く考えなかった。かなり後になって、雅恵の身の上話を聞いてなんとなく分かる気がした。1946年に帰国した継母と妹の要請を振り切って中国に残ってしまい、彼女たちに合わせる顔がなかったのであろう。せめて読み方を変えて、迷惑をかけまいと考えたに違いない。

昼近くになって目的の高速道路インターに着いた。英子夫妻に車で先導してもらい、本家に到着である。意外にも昼食の用意がしてあった。叶夫妻は神妙に構えて黙ったままであった。そのとき牟田は気がつかなかったが、彼らは偽息子であることが露見するのが恐かったのである。

墓参りも無事終え、雅恵も、従弟のM氏や従妹の英子といろいろな話をし、満足そうであった。牟田もお土産をもらった。しかし、雅恵と叶夫妻にはなかったのである。ただ、M氏が雅恵に帰国祝い金を差し出したただけであった。海中家にとって、雅恵はあまり好ましくない存在だったようだ。これも、牟田は後になって納得するのだが、当時の牟田には理解できないことであった。

もう一つ、牟田にはすぐには呑み込めないことがあった。それは、M氏が言うのに、

「牟田さん、1980年のとき、面子が丸つぶれでしたよ。私も帰国したばかりで余裕がないのに、住宅を確保し、家具も揃えました。でも、待てど暮らせど、雅恵さんが帰ってこなかったんです」

牟田に向かって怒りような口調で話しかけた。あまりの勢いに、牟田はひたすら謝るばかりであった。牟田は「なぜ私が怒られているのだろう」と、理由が分からないまま頭を下げていた。1980年に帰国の話があったなど、牟田が知る由もなかったからである。

しばらくして、M氏から、

「牟田さん、あなたを厚生省からの回し者かと思っていましたよ」

と言われ、1980年帰国の件の詳細を聞き、やっと納得した牟田だった。

M氏としては、一年前に身元引受人を辞退した関係で、厚生省が調べに来たと思ったそうである。先に説明したように、今回、叶果正(実は李修民であるが、M氏も気づいていない)が帰国を2年以上遅らせた。だから、17年前の1980年の悪夢が再来したかと思って、M氏は身元引受人を辞退したのである。

このように、あまり歓迎されない雅恵であったが、墓参りできたという嬉しさを胸に所沢へ帰った。叶夫妻も身分が疑われることなく過ごせて一安心であった。もちろん、そんなことは牟田も気づかなかった。

引っ越し

5月の連休がやってきた。牟田は雅恵の孫(実の孫ではないが、牟田はまだ気づいていない)を遊園地に連れて行こうと思った。連休も半ばに入った5月4日、子供たち4人を連れて、牟田は読売ランドへ行った。彼らは大きな遊園地で遊んだことがなかったのであろう。大喜びだった。楽しかったけれど疲れて所沢へ帰り着いたとき、午後遅くになっていた。

叶の妻(実は、李の妻だが、身元引受人である牟田はまだ気づいていない)が用意した早い夕食のテーブルの前で、牟田は見知らぬ女性を紹介された。

「牟田先生、この人は私の湖南省時代の友人で、宋暁文さんです。日本の大学に留学して、今は会社に勤めています」

と叶果正が説明してくれた。まだ30歳未満と見受けられる若い女性であった。このとき、牟田はこの人が廖青の娘であると知らなかった。廖青は、この1年の間に牟田が手紙を湖南省の叶に送ったときの宛先に、「廖青転(方)」として入っていた。いわゆる連絡係である。そして、宋は東京で母の兄の近くに住んでいる。

このあと、5月半ばに住宅が決定し、落ち着き先が横浜市になった。同時に、中国語のできる自立アドバイザーが藤堂佐知子と決まった。これ以後、牟田は藤堂と二人三脚で雅恵家族の面倒を見ていくことになる。

2日ほど経った夜、牟田はM氏に電話を入れ、墓参の礼とともに、雅恵の落ち着き先が決まった旨を告げると、

「先生、ありがとうございます。車一杯分の衣類を差し上げます。トラックで運んであげましょう」

と親切な申し出があった。これに対して、牟田は、

「ありがとうございます。衣類は私のワゴン車で取りにうかがいます」

と応えた。M氏が元残留孤児で生活は安定しているが、裕福であるはずがないと、牟田は思い、このように応えたのであった。M氏は、雅恵の兄弟姉妹について詳細を教えてくれた。それは厚生省には伝えていないが、雅恵には二人の妹が日本にいるということであった。牟田は驚くとともに、この家族への関心が深まった。

それから何日か経って、牟田は区役所で県営アパートの鍵を3個受け取り、譲りうけていた中古家具を運び込んだ。これで、いつ引っ越ししても当面の生活に支障はなくなった。

2000年6月1日、いよいよ所沢から横浜へ引っ越しである。牟田は自分の車を所沢まで運転して行った。転出の手続きを済ませ、雅恵家族7人を、牟田と神奈川県内の2台の車に分乗させた。昼過ぎに横浜市に到着後、区役所で転入、外国人登録等の手続きを行い、夕刻前にアパートに落ち着いた。

翌6月2日、突然厚生省から電話が来た。

「厚生省の残留孤児等対策室長です。海中雅恵の件で、変なうわさがあります。お聞きになったとしても他言は無用です」

そんなうわさなど聞いたことのない牟田には、理解の範囲を超えていた。しかも、厚生省は何のうわさか説明をしてくれなかった。牟田には、雅恵と故郷の人々との確執、所沢での雅恵と叶家族間のよそよそしさぐらいしか、牟田には思いあたらなかった。

しかし、彼らと初めて出会ってからのことを思い起こしてみると、農民にしては叶果正も、その妻も手が荒れていない。手の荒れていない農民もいるのかなと牟田は思っていたが、ひよっとしたら

叶は厚生省に農民だという嘘の申告を出したのではないか……、これがうわさの真相ではないか……、と思いめぐらせた。

翌3日は、末の孫たちを小学校と中学校へ案内し、牟田と藤堂は休む暇もない。この日の夜、従弟のM氏に電話し、

「明日、衣類をいただきに参ります」

「気をつけて運転してください」

というやりとりした後、次の日に至る。

牟田は車で雅恵を迎えに行った。すると、叶果正が、

「私も一緒に手伝いに行きます」

と言った。

「無理です。M氏によれば、たくさんの衣類が車内一杯になるくらいあります」

と牟田は応えた。

これに対して、叶果正が言い足した。

「じゃ、娘の冰冰が行きたいと言っているから、連れて行ってください」

「やっぱり、人が増えた分だけ衣類の量が減るからもったいない」

といったやりとりをして、牟田は雅恵だけを連れて、中部地方のM氏の家に向けて出発した。叶が偽の身分発覚を恐れて監視員を同伴させる、これ程の用心をしているとは思えない牟田であった。

ほどなくM氏宅に到着した。ひとしきり昔話をし、衣類のお礼を言って、とんぼ返りした。何箱ものプラスチック・ケースに入った衣類をいただいた。

このように雅恵一家の世話で忙しかったためもあって、変なうわさに関する厚生省からの電話の件を、牟田はすっかり忘れてしまっていた。

日本語研修センター

1日おいた6月6日の午後、牟田が雅恵宅を訪問すると、雅恵と嫁との仲が嫌悪になっていた。はは一ん、嫁一姑の喧嘩だなど、牟田は直感した(実は、赤の他人の仲違い喧嘩だが、牟田はまだ気づいていない)。日本でも中国でも、世界中、この問題は永遠に変わらないようである。

しばらくして、区役所生活保護課のケースワーカーの中石が訪れ、保護の程度を確認する話し合いに入った。雅恵が来日前に腰を骨折し、医者にかかる費用を工面できず、ベッドに寝たまま3カ月を過ごしたことに関心が集中した。これは、その年の4月から発足した介護保険の対象になるからであった。この事実は、あとで非常に重要な役割を果たすことになる。

ケースワーカーが最後の締めくくりとして、雅恵の家族構成の確認に入り、結婚歴を尋ねた。これに対し雅恵は、

「叶と結婚して息子と娘を産みました。ここには嫁と孫4人を含めて、7人います」

と答えた。中石が続けて、

「他に、中国に残っている家族はいませんか」

と尋ねると、

「はい、いません」

と、雅恵はありのままを話しているように見え、不自然さはまったくなかった。しかし、牟田は、厚生省から渡された資料の中に「叶鵬伯との結婚前に干学文と結婚、子供あり」と付記してあったのを思い出し、不可解に思った。

さらに不思議なことに、この日の夜、牟田に宋暁文から電話がかかり、

「叶と3人で会いたいのですが……。叶が相談したいということです」

と言われたことである。

「今週は忙しいです。来週の月曜ならいいです。日取りを決めたいので、日曜にこちらから電話します」

と牟田は返事をした。

宋暁文という女性は、5月の連休時に所沢センターで会った人である。彼女が電話をかけてきた理由は、嫁一姑の喧嘩の取り成しであることが見え見えであった。その原因は生活保護費等の金銭関係であろうと、牟田は見当をつけた。

翌朝早く牟田は雅恵宅を訪問し、さっそく嫁一姑の喧嘩の仲裁を念頭において、話を金銭問題にしぼって話した。

「厚生省から、自立支度金89万円をもらいましたね。これを雅恵と叶家族とに公平に分けましょう」

と牟田は切り出した。

「このうち64万円を叶果正のほうへ分けましょう。雅恵さんは唯一の日本人で所帯主です。叶側に6人がいますが、そのうち4人は子供です。それに全員、日本人ではありませんね。だから、89万の7分の6の76万円では多すぎますね」

このようにして89万円を、叶家族に64万円、雅恵に25万円と分割した。すると、叶の奥さんである王悠蓮がにこにこ顔に豹変した。

やはり、牟田の想像したとおり、雅恵と嫁との間のいがみ合いは金銭問題から起こったことだったのである。もちろん、その想像が正しくないことは後で判明することになるのだが。

逆に、雅恵は少し機嫌を損ねた。

「雅恵さん、買い物、食事の用意、その他すべて、お嫁さんにお世話になっているのですよ。あなたには25万円でも多すぎだと思います」

と牟田が少し声を荒げて付け加えると、雅恵はしぶしぶそれに従った。

「いいです。25万円でもいいです」

このとき、なぜ雅恵がお金に執着するのか理解できなかった牟田も、一カ月後にはその理由が解るようになる。

さらに、生活保護費は1対6の割合で分けることも承諾させた。

しばらくして、自立アドバイザーの藤堂が、雅恵宅に到着した。すると、叶果正は雅恵を促した。彼女はおずおずとアドバイザーの藤堂の前に出て言った。

「藤堂さん、きのう家族構成で言い忘れていたことがあります。ここに書き足しました。中石さんに渡してください」

あとで解ったのだが、雅恵は昨夜、叶にひどく叱られていたのだった。

「なぜ、区役所の人に本当のことを言わない。この紙に名前を全部書け」

このように強制されて、付け足した15人もの干／叶家族は、雅恵の最初の結婚による子や孫になっていた。これは、彼が1998年8月、厚生省に修正申請した雅恵 - 干、および雅恵 - 叶の家族と一致していた。この二つの(後で偽と判明した)家系表は以下の通りだ。

親	子	孫	
干学文	干銀官／長男	干玲子／長女	} 追加家族 (偽だと後で判明)
海雅英	濡定恵／嫁	干崇波／長男	
		干崇亮／次男	
		干靖子／次女	
	干銀貴／次男	干凱 / 長男	
	李淑英／嫁	干馨 / 次男	
		干娟 / 長女	
	干桂英／長女	劉劍 / 長男	
	劉光明／婿	劉丹 / 長女	
叶鵬伯	叶果正／長男	叶民芬／長女	} 来日家族 (偽だと後で判明)
海雅英	王悠蓮／嫁	叶民成／長男	
		叶冰冰／次女・中学	
		叶真真／次男・小学	
	叶寧心／長女	李雄 / 長男	
	李陳昭／婿	李雁 / 次男	
		李梅 / 長女	

追記の20人を雅恵に書かせ、アドバイザーの藤堂に渡したとき、牟田は疑念とともにぴーンとく
るものを感じた。

「これが、厚生省の言ううわさに違いない」

それでも、牟田は、雅恵と一緒に住んでいる家族が偽者だとは思ってもよらなかった。将来呼び
寄せる家族を偽者として(たぶん、金儲けのために)追加したのだと想像したのだった。

この日、6月7日は中国帰国者自立研修センターで叶一家4人(夫妻と上の子2人)の面接日
である。このセンターは日本語を学ぶ学校で、月曜から金曜まで、午前9時半～午後4時までが授
業時間となっている。電車を二本乗り継いで登校する経路を教えるために牟田と藤堂が同行し
た。

日本語研修センターでの面接を終え、全員揃って帰宅後、牟田と藤堂は雅恵と叶果正を伴って
銀行へ行った。雅恵の郵便貯金から64万円をおろし、新たに叶の預金口座を開設し、そこに先
ほどの64万円を振り込んだ。これで金銭問題は落着したが、さらなる難題が月末に発生するこ
とになる。

その週、牟田と藤堂は目の回る忙しさだった。一日おいて、6月9日には研修センターの入学
式があった。叶一家の4人は2日前の実習通り間違えずに登校でき、式辞が中国語で行われる
せいか、リラックス・ムードである。藤堂と牟田の傍に、満谷英美子も残留孤児の自立アドバイザ
ーとして出席しており、まさか後でこの物語に登場しようとは夢にも思っていなかったという。

入国管理局

この後も、牟田と藤堂は休む暇もなく、叶一家に振り回された。末の2人の子、冰冰と真真の学校への連絡に追われた。中学校は学校自体が忙しく、次女の冰冰1人に対して深く関わる暇がなかった。一方、小学校は余裕があり、次男の真真の日本語教育に力を入れてくれた。校長の話では、

「学内の先生に日本語教育を頼んでいます。授業時間内でやりくりしています」

とのことであった。いわゆる「取り出し教育」である。

その上、叶家族は病院へ行くことを頻繁に要請した。雅恵と嫁を除いて全員がB型肝炎にかかっており、その検査に時間を取られた。牟田は驚いたが、中国ではこのようなケースは珍しくなく、病院の管理体制に問題があるとの話を聞いた。病院通いが無料と分かると、ありとあらゆる身体の不調を家族が訴えるため、牟田と藤堂は繁忙をきわめた。

雅恵は、中国での極貧生活の影響で歯が一本しかなく、総入れ歯の作製を切望した。予約した6月半ばに、牟田は雅恵を近くの歯科へ連れて行った。診察までの待ち時間に牟田は雅恵に質問した。

「雅恵さん、この間、訊かれたとき、初め干学文との結婚について何も話さなかったですね。でも、次の日に、その結婚で生まれた子供と孫について紙に書きましたよね」

「そうです。最初、中石さんに訊かれたとき、うっかり忘れたのですよ。なに、家族の数が多かったものですから」

牟田は自分の過去を思い出していた。彼は最初の結婚で生まれた子供3人の生年月日を正確に覚えていた。しかし、2回目の子供たちの月日は思い出せても、誕生年がすぐ出てこないのだ。最初の子供たちの存在さえ完全に忘れた雅恵が嘘をついているに違いない。干の子供たちは存在しなかったに違いないと、牟田は思った。

これに加えて、その日奇妙なことがあった。歯医者へ出かける前に、雅恵が自分のハンドバッグから手紙を出そうとしていた。

「牟田先生、あなたに手紙を書いたのですが……」

続けて、雅恵は深刻な顔で、

「確かに、この中に入れておいたんですが……」

と言ったきり黙りこんでしまった。牟田の頭の中で、先ほどの思いが確信に変わっていったことを覚えた。

「雅恵さんは決して認めないだろうが、嘘はやはり嘘だ」

6月の後半、第1回目の生活保護費が支給された。牟田はその7分の6を叶の口座に振り込む手続きのために雅恵宅を訪問した。

「叶さん、明朝早く、保護費の7分の6を口座に振り込みます。あなたの暗証番号を教えてください」

すると、叶は、

「先生、60xyです」

と気軽に教えてくれた。叶は牟田を完全に信頼しきっていた。

この暗証番号を叶の誕生日、1953年8月1日と、また電話番号x9x—0xxxとも比べながら、牟田は首をひねった。

「おかしいなあ。あれほど、覚えやすい数字を4桁使ってくれと頼んだのに」

と独り言をいいながら、牟田は振り込んだ。叶の銀行口座への振込みが、これで最後になろうとは、このとき牟田も叶も想像だにできなかった。

この後、牟田は脚の悪い雅恵を何回か歯医者へ連れて行き、干との結婚で生まれたという子供たちについて嘘偽りはないか尋ねた。そのたびに、雅恵は、

「そんなことはありません。なに、正しいことです」

と言い張った。そして、6月の末に白内障の診察に行った。歯医者で駄目なら、眼医者ではどうかと、さらに干家族について尋ねたが、

「なに、牟田先生もしつこいですね。私は我慢強いですが」

と言われて、牟田はあきらめてしまった。

次の日、7月1日は土曜日であった。所沢から引っ越してちょうど一カ月目に入っていた。牟田が疲れてうとうとしていると、電話の音が突然鳴った。

「牟田先生、叶です。午後二時、電報来ました。すぐ来てください！」

何事が起こったかと驚き、牟田は着替えもせずに車で20分走り、雅恵のアパートへ着いた。

「急に何が起こったのですか？」

すると、叶の母親である雅恵が一通の電報を差し出した。

「先生、これを見てください。娘が急病です。すぐに中国へ連れて行ってください。とても心配です」

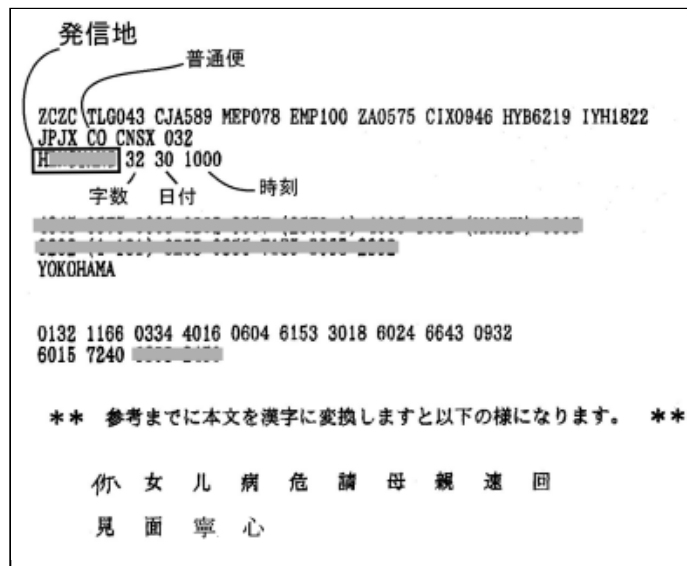
牟田は電報を一瞥して、不審に思った。発信地が娘の住むS県ではなく、遠くのH市になっていた。電報そのものは数字の羅列で、相手に届ける前に漢字かな混じり文に直すのである。この電報は電文だけが漢字に直っており、発信地はローマ字で書いてあった。英語のできる牟田には分かるが、叶にも雅恵にも意味不明の英語だったのだ。この電報を枠内に示す。発信地名を一部塗りつぶし、雅恵の娘を示す最後の漢字二文字を「寧心」に書き換え、説明も加えてある。

この電文を訳すと、

「あなたの娘が危篤です、母親が速やかに会いに帰ることを請う、寧心」

となる。

牟田は、電報の発信地が危篤の娘の居住地と大きくかけ離れた場所にあることを、後で地図を



見て再確認した。また、この電文の奇妙な点にも気づいた。危篤のはずの娘の名で打電し、自分が死にそうだとやっているのだ。死ぬ前に奇跡が起こり、何10キロメートルも離れた都市へ歩いて行けたとでも言うのであろうか。

牟田はこの電報を読み終えると、その場でKDDに電話を入れ、発信人の調査を依頼した。この依頼は早口で言ったため、叶にも雅恵にも牟田のやっていることが分からなかったようである。調査の返答は次の日に来た。

「通常の場合、このような調査結果を公表することはありません。なにか公的な身分を明確に示すものをご提示願えませんか」

とKDDの担当者が要求した。これに牟田は応答した。

「私は、海中雅恵さんの身元引受人です。今から、厚生省および神奈川県からの正式依頼書をFAXで送ります」

数字の羅列を漢字に直すのに数10分要した後、KDDは調査結果をFAXで送ってきた。それは牟田の確信を裏付けるものであった。先の電報は寧心の家族が打ったものではなかったのだ。しかし、なぜこんな手の込んだことを……。

牟田はその夜、中部地方のM氏に電話してこの件を伝えた。M氏は驚きもし、あり得ることだと納得し、20年前の雅恵帰国申請関係の書類を郵送すると約束してくれた。

このように電報が届いてすぐに雅恵宅を訪問したが、帰り際、牟田は夜7時以降に寧心の家に電話するよう叶に頼んだ。その日の夜遅く、叶から電話があり、

「母に替わります」

と言った。電話を替わった雅恵は心配そうに話した。

「午後10時に中国へ電話しました。娘の15歳の次女が出て、”おばあちゃん早く帰ってきて、母が入院している、病気が重い”と言いました」

寧心は、どうも入院したようだ。しかし、その次女はS県におり、そこは電報が打たれたH市から非常に遠い。牟田は頭がこんがらかった。なぜ他人が寧心の危篤電報を打ったのか……。その理由が理解できないのだ。そこで、今までの事実を整理してみた。

- 1) 息子、叶果正は偽(と思われる)追加家族を厚生省に申告した。
- 2) S県に住んでいる娘の名義で、H市から「自分は重病だ」との電報が来た。
- 3) その電報を打った人はH市におり、娘の家族(の名前)ではない。
- 4) S県の娘の家に電話すると、その次女が「母が重病だ」という。

翌7月2日の日曜日、叶が牟田に電話をかけてきた。

「王さんが雅恵さんに付き添って、一緒に帰国します」

王は叶の妻である。これを聞いて、牟田はおやつと思った。

「兄の叶果正は、自分の妹で危篤となっている叶寧心を見舞わないつもりか？」

一般の人なら、妹の危篤に際して、実の兄が駆けつけないのは異常だと思うはずである。

牟田には、この電報の謎がぼんやりと見えてきた。

「叶果正を偽息子と考えれば、つじつまがあう……」

雅恵と叶家族とのしらじらしさ、偽の追加家族、農民らしくない手、これらは牟田の解釈と矛盾しない。この電報は叶果正が打たせたにちがいない。なぜ、こんな手の込んだ電報を打たせたのか……。しかも、雅恵の家族も承知しているらしい。

先ほどの「王さんが帰国する」という電話で、牟田はこのような疑いをもちつつ、しかし、さりげなく、

「では、7月3日の月曜日から、雅恵さんと王さんの帰国手続きをはじめます」

と言って電話を切った。

月曜日、牟田は雅恵を区役所へ連れて行った。一時帰国に必要な旅券用に住民票を取るためである。そして、牟田は自分の推測を確かめるために言った。

「雅恵さん、あなたは偽の息子と一緒に暮らしているのでしょうか」

雅恵はみるみる顔色を変え、次のように告白した。

「もおしわけありませんでした。今まで恐くて何も言えませんでした。李たちに虐待されて、先生に助けの手紙を書きましたが、李民芬に取られてしまいました」

やはり、牟田の想像どおり、雅恵は偽家族と一緒に来日したのだ。

雅恵をアパートに戻して、牟田は東京入国管理局に直行した。これは、牟田自身の身の保全身をはかる意味合いもあった。事件が発覚したあとで入国管理局から

「牟田さん、あなたは事実を知っていたのに隠していましたね」

と、罪に問われるのを嫌ったのである。

東京入管は、東京駅から歩いて10分のところにある。牟田は26年前の自分を思い出していた。

「あのころ、移民局から赤紙をもらったよな。——直ちに本国から出国を命ず——」

牟田は学位を取りつつあり、同時に金を稼ぐために、就職が決まり2週間前に転居したばかりだった。このため、学生ビザから一時労働ビザへ切り替え最中であつた。牟田を採用した先は、日本人を初めて採用することもあって、移民局への申請書に手抜きがあつたらしい。申請して2、3週間で上記の返答があつた。さいわい、他に職の提供があり、永住手続きに入った。

これを思い出し、日本の入国管理局の遅々たること甚だしいと、この後、牟田は怒りをこめて感じるようになる。

東京入管に到着すると、牟田は一般相談室の室長に直接かけあつた。この室長は事情を呑み込み、J部門の主席に牟田を案内した。主席の灰山氏に牟田は知っている限りの情報を提供しはじめた。灰山氏は話を聞き終え、事件を理解するとともに、過去の実例を大きな表にまとめたものを何枚か牟田に見せてくれた。極端な例として、正しい帰国残留孤児の一家族に対し、150人もの偽家族がいもづる式に来日していた。これら多数の家族を一網打尽にしようと逮捕に踏み切ったときには、既に半数が逃亡したあとだったという。

雅恵家族のように、偽家族が残留婦人に同伴して帰国するなんて前代未聞、空前絶後であつた。しかも半年で発覚したのである。この後も公開されなかつたが、本事件が政府内の各部局に知れわたると、当該部局は興味津々で、お互いに問い合わせが多数かつ頻繁だったという。

牟田はこの事件の解決と同時に、雅恵本人だけでなく、李一家の幸せをも考慮する必要があつた。このあと、牟田は機敏に動き回りはじめるが、事は単純にも、迅速にも進行しなかつたのである。入国管理局の対応は牟田の予想からはみだし、苛立ちを増長させるばかりになる。

偽造旅券

前節で述べたように、雅恵は偽家族との帰国について告白したが、その中で、李民芬に取られた助けの手紙に言及した。牟田は、この手紙を1カ月後に回収した。これは2枚に書いた訴えの手紙であった。そのうち2枚目を次頁に示してある。「李」、「牟田」、それに「叶寧心」は書き換えた文字である。

雅恵は、告白のあと、偽の息子の本名が叶果正でなく李修民であると告げた。李民芬は李修民の兄の娘で22歳であり、本物の叶果正の娘(19歳)の代わりに来日していると、雅恵は白状した。牟田が雅恵宅を訪問した6月は、いつも李の妻と李民芬が日本語学校に行かずに在宅していた。これは、雅恵を見張って、告白するのを防止していたのだ。

この日、7月3日、雅恵からさらに詳しいことを聞いた。

「昨夜、息子に電話しました。息子の叶はH市にいます。叶家族は病気の寧心の所に帰らず、李の妻の実家にじっとしています」

雅恵はさらに続けて、
「李修民が、”七月十日頃に息子がS県に戻れる”と言いました」

李は旅券が一週間程度で取れると期待して、雅恵にこう話したのだった。やはり、一昨日の電報は、H市から打たれたものであった。昨日KDDから届いた調査資料では、発信人の苗字が徐となっているのを思い出し、牟田は質問した。
「雅恵さん、李の奥さんの名前は徐といいませんか？」

「そうです。なに、よく知っていますね」

と驚いた雅恵はさらに続けて、
「李の奥さんの名前は徐麗青といます。上の二人は李修民の兄の子で、長女が李民芬、長男は李民成といます」

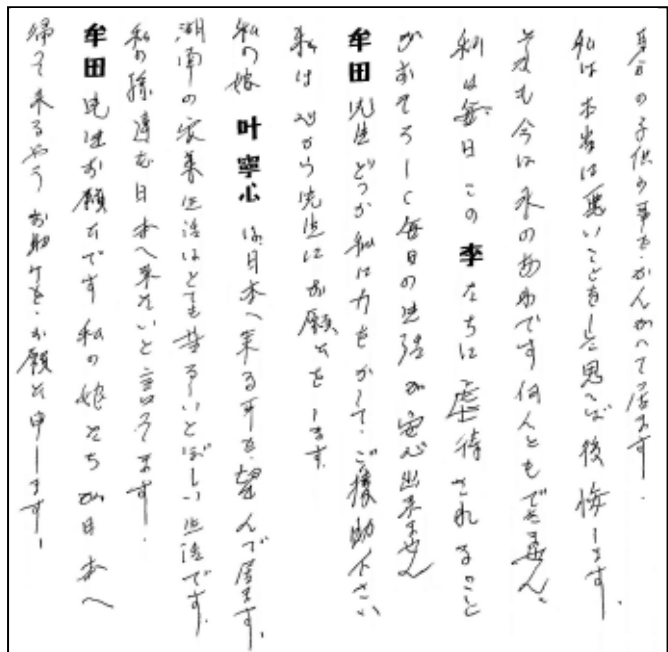
雅恵は不安そうに言葉を続けた。

「この電報は偽っぱいです。寧心の病気が本当だとして帰国しても、金がないからどうしようもない。手術の費用は捻出できません。だから帰るのはやめます」

これに対して、牟田は言った。

「中国へ帰れば、再来日させてもらえないかもしれません。しかし、帰国するふりをしていてください」

このように、偽家族の全容が把握できたのである(後で取得した正式旅券から判明するが、正式戸籍上、李民芬は李芬、李民成は李明成—これも仮名—であり、この正式名を雅恵は知らなかった)。下の二人は実子で、女の子は李冰冰、男の子は李真真という。全容は本書33頁目に記載



済みである。

翌7月4日に東京入管から帰宅したあと、牟田は偽葉が偽電報を打った理由を推測した。そして、灰山氏に電話を入れ、説明した。

「実の息子はH市にいます。この葉一家を故郷のS県へ穏便に戻すために、偽電報を打たせたの
でしょう。雅恵と一緒に ”日本もいいけど、中国のほうが暮らしやすいよ” と村の人々に言い訳し
ながら、一家を帰宅させるつもりだと思います。これで面子が立ちますからね」

「なるほど、これなら雅恵さんと一緒に、本物の息子は安心して帰郷できるね」

と灰山が相槌を打った。

さらに、牟田は雅恵の帰国を心配して、

「仮に雅恵さんが中国へ帰ると、李は彼女を再来日させない可能性があります。李家族の身柄
拘束を早く行っていただけませんか」

「それは無理ですよ。その前に本件を横浜入管へ移管する必要がありますから」

雅恵家族は成田で入国し、所沢に4カ月余り生活していたが、今は横浜に住んでいる。したが
って、最後の詰めは横浜の入国管理局で行うのだそうである。

そこで、牟田は雅恵の帰国延期で一計を案じた。旅券取得に必要な戸籍は中部地方にあり、
郵送での取り寄せに時間がかかる。これで戸籍抄本の取得を遅らせることができる。牟田はこの
ように考え、雅恵宅を訪問し旅券用のデジタル写真を取ったあと、戸籍抄本郵送の依頼書を中部
地方へ速達でなく普通郵便で送った。

その日の夜、さらに思いつきの「雅恵―恵運招待突然寧心電話パーティー」を8日の土曜日に
開催すべく、根回しの電話を入れはじめた。鄭恵運は、海中雅恵と同時に所沢から横浜へ引っ
越してきた残留孤児で、牟田の近くに住んでいる。牟田はかなり頻繁にこの孤児の家へ遊びに
行っている。この企画は、雅恵と恵運の両残留邦人とその家族を招待し、パーティーの途中で突然、
寧心に電話を入れるというものであった。牟田は寧心が病気でないと信じており、間違いなく寧心が
電話口に出るものと予想したのだ。寧心さえ電話口に出てくれれば、

「寧心、よかったね、病気が早く直って」

と言って、李の面子を潰さずに雅恵の帰国を中止に追い込める。そんなことを楽観的に想像し
て、牟田は計画したのだった。

翌五日、中部地方のM氏から、20年前の雅恵と息子と娘の3人が写っている写真が送られてき
た。そして、入管の灰山氏に勾留の件で電話をかけた。

「20年前の息子は、偽の葉果正と全然似ていません。なんとか、早い勾留をお願いできません
か」

「心証的には、雅恵さんの同伴家族は偽者だと思う。しかし、証拠物件が雅恵とM氏の身内側に
あって、貧弱ですよ……」

「灰山さん、20年前の雅恵の帰国申請書類が厚生省に残っていませんか」

この後、厚生省から入国管理局へこの書類が送られた。しかし、まだ息子の結婚前の申請であり、
現在のような家族構成でないのが弱点であった。それに、20年間で顔かたちが現在のように
変化しないという保証もなく、当時の写真は現在の李修民でないとの立証ができなかった。とい
うわけで、李家族を勾留する有力なきっかけが掴めないのであった。

ところが、思わぬところからボロが出るのである。この日の午後、雅恵を歯医者へ連れて行って

帰宅すると、李の妻の徐が、

「牟田先生、私が母と一緒に帰国します。私の帰国手続きを進めてください」

と頼んだのである。そして家族の中国旅券6枚を差し出した。ここからは、事態が急展開していく。この旅券のうち徐の分を返し、牟田は言った。

「王さん、藤堂さんがあなたを連れて横浜入国管理局へ行き、再入国手続きをしてくれます。この旅券を持って行ってください」

徐麗青(これは実名、虚名は王)は中国人だから、手持ちの中国旅券が使えるが、日本へ帰ってくる際に、再入国手続きが要求される。

帰宅後、自立アドバイザーの藤堂に再入国手続きを頼み、そして残りの5枚の旅券を手に握ったまま、牟田は灰山氏に電話した。

「旅券が怪しいと思います。検査してはどうでしょうか」

翌朝早く検査を行うことに決定し、その手順を約束した。

翌6日、鉄道の駅で灰山氏と待ち合わせ、牟田は旅券5枚を渡すと、灰山氏は一瞥して写真の張替えを見破った。正式旅券を取得したあとで、写真だけ張り替えたものだという。もちろん、張替え前の正式旅券でさえ、偽名を用いている。一方、藤堂は徐を連れて横浜入国管理局へ行き、再入国許可証を即日取得した。

身柄拘束

その日、6日の早朝、雅恵から電話があり、
「昨夜10時に寧心に電話しました。以前の電話の時と同じ孫娘の金光月が出て“早く帰ってきなさい、おばあさんが帰ってきてから子宮の手術します”と言いました」

李修民は早く雅恵を中国へ行かせたかったのであろう。H市に捕われの身の叶果正にせつつかされていたに違いない。いつも同じ次女でなく、長女や娘婿にも電話に出させるという芸当をする余裕がなかったのであろう。これではますます怪しまれるとは考えなかったに違いない。

翌7日午前、東京入管の灰山から連絡があり、今後のことで協議することに決定した。そして、鉄道の駅で待ち合わせ、昼食をとりながら話し合いに入った。中部地方のM氏から送られてきた20年前の帰国申請に関わる資料を渡し、偽造旅券による身柄拘束の見通しについて牟田は説明を受けた。念のため、雅恵の事情聴取を取る必要があるとのことであった。この後、牟田は何食わぬ顔で、5枚の偽造旅券を李に返した。

李一家の勾留が明るく見通せたため、「雅恵一恵運招待突然寧心電話パーティー」を中止するよう決定し、牟田は自立アドバイザーの藤堂に連絡した。

週が明けた7月10日の月曜日、牟田は郵送されてきた戸籍抄本を持って、雅恵とともにパスポートセンターへ行った。6日前に撮ったデジタル写真の印刷解像度が低く、端部にギザギザが出ており、申請は受理されなかった。帰宅した牟田は、しかし、

「叶さん、旅券を申請してきました」

と平然と伝えたのである。

翌火曜日に、東京入管から電話が入り、

「牟田さん、明日午後2時半に鉄道の駅近くで、雅恵さんの事情聴取を行いたいと思います」

翌12日の水曜日、事情聴取の前に、念のため牟田は李たちが通っている日本語学校に電話を入れた。

「牟田です。叶たちは出席していますでしょうか？」

この学校には、まだ事件の真相を明かしていないので、従来の名前、叶を用いた。

「はい、いつも通り二人が出席しています。今日は都合により午前中で終わります」

これを聞いて、牟田は慌てた。これでは雅恵を連れ出す前に李が帰宅し、非常に都合が悪い。そこで、

「申し訳ありませんが、確実に十二時を過ぎるまで授業を行ってください」

と依頼して、大急ぎで東京入管に電話を入れた。

「恐れ入ります。今日の事情聴取を前倒しで、午後一時までに実施願えませんか」

急遽、午後一時に繰り上げ決定した。

雅恵を連れ出すとき、

「パスポートセンターから電話があり、旅券写真を撮り直せと言われました」

と李の妻、徐麗青に対して虚偽の弁明をした。この日もまた、彼女は日本語学校をサボって、雅恵の見張りをしていた。

駅の近くにある線路沿いのアパート裏で、ワゴン車の中に入り、事情聴取を受けた。聴取に

時間がかかりハラハラしたが、なんとか二時半に終了、雅恵と牟田が署名捺印した。実際、写真の撮り直しにしては長すぎたが、帰宅後、徐は気づかなかったのか、不審な顔つきをしなかった。

この事情聴取は、スパイ映画さながら、スリル満点であった。というのは、途中、植木屋に植栽確認用の写真を撮られたからである。そのアングルに係員たちの公用車が入っていたのだ。もう一人の係官が車から飛び出し、手帳をかざしながら呼び止め、「かくかくしかじかの事情です。フィルムを破棄してください」

と柔らかく命令した。公用車を移動した後、それが視野に入らない別写真を撮らせ、危うく難を逃れた。

雅恵を連れて帰宅後、
「撮り直した旅券写真を持って、これからパスポートセンターへ行きます」

と弁明して出る。もちろん、旅券写真を撮り直した訳ではないので、実際には行かなかった。何時間か経ったあと、パスポートセンターから帰ったふりをして、雅恵宅へ戻った。歯医者予約があり、雅恵の入れ歯が完成、引渡しの日であった。案の定、日本語学校から既に帰宅していた李修民が、

「私も歯医者へ一緒にいきます」

と言いながら、雅恵について来た。この同行を避けるため、今まで平日の午後半ばまでの予約を入れていたのである。

この日、12日の深夜、雅恵の旅券用写真をパソコンから高解像の200dpi で昇華印刷して、アナログ写真と同等の出力を得た。

次の13日の午前中、この昇華写真を持って、雅恵を連れてパスポートセンターへ旅券の申請に行き、旅券の申請が完了である。帰宅して、

「7月21日から旅券取得が可能になります」

と李に伝えた。
この日の夕方、東京入管の灰山氏より電話があり、
「7月17日の週での拘束は、たぶん駄目でしょう。その1週間後はたぶんOKです」

ということだった。
これは、警察による逮捕と同様、拘束後48時間以内に他の司直に引き渡す義務があるからである。7月17日の週には木曜に休日があり、したがって、この条件を満たせない可能性があった。さらに、7月21日より前では、李の末の子供たち、冰冰と真真の学校が夏休みに入っておらず、教育上の問題があったためでもある。

翌14日の夜、中国S県にいる寧心の次女から電話が雅恵にあり、またまた「早く帰って」と言われたという。李修民も叶果正もともに焦っている。

それに呼応して、牟田もますます苛立ってきていた。というのは、この後で業務が横浜入管へ移行するが、身柄拘束の日程を確定してくれないのである。雅恵帰国をこれ以上遅らせるわけにもいかず、さりとて、いつ拘束するのか不明で、牟田は大きな圧迫を感じていた。

週が明け、17日の月曜日は、前週末に決まった横浜入管との会談の日である。横浜入管K部門のY氏と、東京入管J部門のA氏が、牟田の家を訪問した。これは、正式な業務移行にともなって、今までの経緯を直接に牟田から聴き取るというものであった。このときも、入管側は身柄拘束の日取りを決して明かさなかった。

翌18日、雅恵の帰国を阻止するため、牟田はめまぐるしく動く。前日、かつて残留孤児の身元引受人の牟田とともに働いてくれたG女史に、牟田はあることを頼んでいた。その返事が電話で早朝に来たのである。

「牟田さん、今日すぐにK病院の事務長さんと交渉して、雅恵さんの入院を頼んでみましょう」

雅恵入院は、牟田が編み出した苦肉の策であった。中国帰国を阻止するには、この手法しか考えられなかったのである。

これも、入管が身柄拘束の日程を確実に伝えてくれていたら、不要なことであった。しかし、思いもかけないところで、この入院が後で役に立つのである。人生何が起こるが分からないと、牟田は痛感した。

その日の午後、牟田はもう1枚の切り札を切った。牟田自身の旅券申請のためパスポートセンターへ行ったのである。これは、万が一、雅恵が中国へ行く事態に陥った場合に備えたものだった。その場合、牟田は雅恵と徐麗青(李修民の妻)に同行する覚悟をしていた。この旅券も後で、牟田自身の中国訪問で大いに役立つことになる。

センターから帰宅すると、K病院へ電話するようにとのFAXがG女史から届いており、牟田は電話した。

「恐れ入ります。7月21日に雅恵さんを緊急入院させて頂きたいのですが……」

「承知しました」

7月21日は、雅恵の旅券を李と一緒に、約束どおり取りに行く日である。どのようにして入院させるのか、牟田は区役所の生活保護ケースワーカーの中石に電話し、次のように説明した。

「雅恵さんには、パスポートセンターの地下駐車場で転んで怪我してもらいます」

中石はK病院と連絡をとって、雅恵を入院させることを事前承諾してくれた。この電話の何日前に、牟田は区役所から入管と電話で交渉しており、中石の上司は直接その会話を聞いて偽家族の件を理解していた。

しかし、牟田にとって頭の痛い連絡もやってきた。その日、18日の夜、厚生省から電話がかかり、「雅恵さんの娘、寧心の入国を入管がすんなり認めるとは思えません」

これは、3カ月後に、牟田の予想を外れて事実になってしまうのである。この娘も違法入国という犯罪に関わりがあると言うわけである。これは正論である。が、戦後55年間も中国で乞食同然の生活をし、苦労をかさね足腰を痛めて帰国し、自立不可能な残留婦人を実の娘が面倒を見る。これのどこがいけないのであろうか。

実をいうと、牟田は入管と雅恵の世話について相談していたのだ。雅恵が自立できず、また一人で生活できないことは東京入管も承知していた。したがって、李一家を拘束する前提として、雅恵の面倒を見る家族を中国から呼び寄せることが暗黙的な了解となっていた。これに関して、厚生省が一言いつてきたのであった。

翌19日、歯医者で入れ歯点検の日である。この歯科医院で牟田は雅恵に言い含めた。

「7月21日に旅券を取りに行きます。地下駐車場で転んでください」

この日の夕方、横浜入管へ念のため電話して確認をとったが、7月25日に拘束を実行するとの確約はできかねるとの回答。したがって、安全を考えると入院は避けられなくなった。

祝日を挟んで、2日後の7月21日がやって来た。雅恵の旅券を取得するため、牟田は雅恵と李修民とともにパスポートセンターへ行く。無事に旅券を取得後、地下駐車場の予期せぬ場所で雅恵は転んでくれた。

「痛い、痛い、腰を痛めた」

と立ち上がれなくなった。この迫真の演技に、牟田も本当に痛めたかと青ざめた。李は心配そうに雅恵にかけより、なすすべもない。牟田は予定通り、

「叶さん、ケースワーカーの中石さんに電話して入院を頼んできます」

と、李修民に言って、遠くの公衆電話へ走る。むろん、電話などせずに電話器の前で時間が経つのを待つのである。雅恵は来日の2年前に2回から転げ落ち、腰を骨折して医者にかかれぬまま3カ月間じっと寝たきりだった。この古傷が、転倒により悪化して入院の運びとなる、これが芝居の筋書きであった。雅恵はこの通りの演技にぴったりの役者だった。

かねての計画どおり、首都高速道路を利用してK病院へ直行し、雅恵を入院させた。牟田が雅恵宅へ帰ったのと入れ替えに、雅恵の偽嫁、徐と藤堂がK病院へ見舞いに行った。藤堂は病院で肝を冷やす思いがしたと、後で語ってくれた。

「持参したパジャマに着替えてくださいと、雅恵さんに言ったんです。すると、ベッドの上でジャキッと立ち上がって着替えるではないですか」

すると、李の妻、徐は

「これじゃ、たいした怪我ではないね。直ぐ退院できるよ」

と逆に慰めてくれたそうである。大した70代、恐いもの知らずの老人演技派パワーであった。週が明けて、7月24日の朝、横浜入管から電話で

「明朝、身柄拘束を実行します。その後すぐ、横浜入管で事情聴取したい」

と連絡があり、さらに付け加えて

「事前に合意してあった聴取場所を、貴殿宅から庁舎へ変更したい」

御上の意向には逆らえません。このあと、李に電話を入れ、

「”雅恵さんは27日に退院できるだろう”と、院長が言いました」

と伝えた。もちろん、李を安心させるためのハツタリである。

そのあと、K病院へ午後一時前に行き、雅恵に明日の事情聴取を伝えた。

「雅恵さん、二泊三日で私の家に滞在し、寧心へ国際電話しましょう」

「なに、大変なことですね。今日は、李が果物を持ってきましたよ」

李は身柄拘束にはまったく気づいていない。

牟田が自宅に戻ると、厚生省から電話が入り、

「明日、事情をお聞きしたいのですが、ご都合どうでしょうか？」

「横浜入管の事情聴取が午前中に始まります。その後にしてもらえますか」

と返事すると、

「入国管理局が優先ですね。その翌日の午前10時に願います」

結局、拘束の翌日に、牟田自宅へ厚生省から派遣と決まった。このとき、自立アドバイザーの藤堂を同席させることも了解してもらった。

7月25日の朝、入管が事前調査で決めていた時刻、8時前に、アパート自室で李一家6人が拘束された。多数の係官が周囲を取り囲み、ものものしい捕り物だったそうである。彼らは何台かのワゴン車に分乗して横浜入管K部門から静かに到着し、機敏に配置に着いたという。雅恵は入院で不在であり、拘束場面に出くわさず幸運であった。

児童相談所

7月25日、約束の11時半へ向けて、牟田は雅恵を連れて庁舎へ事情聴取に行くべく、一般道路をゆっくり走る。ときどき停車して電話を入れ、庁舎に入ったとき李一家と鉢合わせしないか確認した。このときほど、携帯電話が欲しかったことはなかった。もっとも、その後も牟田は携帯なしで生きてゆくのであるが。

お昼ちよどに、若いS氏による事情聴取が始まった。2週間ほど前にワゴン車の中でやったことがあるので、違和感はなかった。雅恵が中国に残留した経緯を説明するために、S氏が、「国民党の将校に見初められ……」

と記載するくだりに、牟田は感謝感激雨あられである。途中、李の末の子供2人、冰冰と真真が児童相談所へ連れて行かれた。義務教育年齢以下の児童は、さすが拘束所にはなじまない。

4時間にも及ぶ事情聴取を終え、牟田は雅恵を連れて自宅へ戻った。藤堂による心尽くしの夕食後、寧心へ電話し、李一家が逮捕されたことを伝えた。牟田の予想通り、寧心は仮病であった。そして、雅恵にとって、娘との心休まる会話になった。しかし、これも1カ月あまりで、不安な会話に変わって行くことになる。

翌26日の午前、厚生省中国孤児等対策室から2人、自立センターから1人、それに神奈川県生活援護課から1人が牟田の自宅を訪問した。彼は、この4人と会談に入る前に、かねてから用意しておいたビデオを部屋の壁に上映した。これは15分の短編映画で、中国から空路帰国、所沢定住センター生活、横浜引越し、それに日本語研修センター入所式を描いた、お涙頂戴の自作ビデオである。上映後、

「悪意なき罪には良き指導を」

と牟田は締めくくった。このように、60年ぶりに日本に帰れる嬉しさから、雅恵がやむを得ず偽家族に連れて来てもらったことを牟田は強調したのだった。

この迫真の演技に度肝を抜かれたのか、はたまた規定の路線だったのか、厚生省から派遣された3人は柔らか対応になった。まず、雅恵に質問した。

「雅恵さん、これで一人になり、寂しくなりましたね。中国へ帰りたいですか？」

「いいえ、私は牟田先生の世話で日本に残りたいです」

すると、厚生省側が

「雅恵さんは一人で生活できませんね。牟田さん、雅恵さんの娘、寧心の一家を日本へ直ぐに呼び寄せてください」

と頭を下げて依頼したのである。これには、牟田も藤堂も驚いた。それまでの対応から、単なる事情の聞き取りだけだろうと、この2人は想像していたのである。

この後、中国語での機敏な対応能力を頼んで、かねてから神奈川県に依頼して決定していた正式通訳員の満谷に連絡を入れ、

「恐れ入ります。急遽、中国への電話連絡をお願いしたいのですが……」

その日の夜、満谷に中国へ電話してもらった。そして、来日の意志を寧心に求めると、しばらく家族全員で話し合った後、

「はい、日本へ行って母の世話をしたいです」

そして、そのためには、母親呼び寄せ招請書を送れとのこと。牟田一藤堂一満谷チームは驚いた。20年前の帰国準備の経験からか、出国入国事情に通じており、貧乏農民ではあるが世の事情に明るく進取的であるとの印象を、このチームは持った。

翌27日も、牟田は分刻みの忙しさであった。この日は、日本語研修センター主催の富士五湖旅行が行われることになっていた。雅恵一家が行けない旨を、失礼ながら早朝6時半に電話で通告した。

その後、雅恵を連れて高速道路をひた走り、中部地方へ彼女の戸籍謄本を取りに行った。午後には、とんぼ返りで横浜入管へ急行し、娘一家の在留資格認定証明書交付申請書類をもらい、説明を受けた。この書類は日本へ入国するためのビザを中国で取得するのに必要となる。ここで、藤堂と落ち合い、雅恵をK病院へ連れ戻した。この入院には公的機関からの好意を受けており、これ以上長く牟田宅滞在は許可されていなかったのである。

翌28日、寧心から依頼された招請書を

「雅恵が一人で生活不可のため介護者として娘家族が必要」

として、入院中の雅恵から署名をもらった。そして、特別航空便で寧心へ送った。これが起点となり、予想以上に早い寧心の中国側旅券取得に至る。それは8月末であった。

7月の末日、横浜入管から電話が入った。李一家の帰国費用(一人あたり6万円)をどうするか相談であった。こんなことまで身元引受人に頼むのかと牟田は驚き、次のように答えた。

「まず彼らの所持金を知りたい。それからの話にして下さい」

この後、牟田は藤堂とともに児童相談所を訪問し、収容されている14歳の冰冰と11歳の真真と遊んだ。ここは、名称から想像できる通りの施設だが、彼らが収容されている部門は一時預かり所である。昔のデパートを思い出させる名称で、この2人と遊んでいると、「僕はアメリカ人だよ」と寄ってくる少年もいた。中は明るく、なんの変哲もない空間だが、外界とは長い階段と錠前で隔絶された閉鎖社会である。子供たちは、ここから外のプールに、川での魚釣りにと出かける。ここへ牟田と藤堂は何回か訪問することになる。

国に帰ったとき、

「日本はひどい所だった」

ではなく、

「もう一度行って見たいよ」

と思ってくれるように、牟田はあらゆる努力をする決意であった。この子供たちだけでなく、横浜入管に収容されている大人4人に対しても、そのような態度で接することになる。

8月に入って最初の日、牟田は児童相談所へ電話を入れた。

「冰冰と真真を6日にズーラシアへ連れて行きたいと思います」

「牟田さん、いつも有難うございます。よろしくお願いします」

さらに、12日には牟田が二人をこどもの国へ、25日には藤堂が港の見える丘公園と中華街へ連れて行った。

しかし、牟田と藤堂にとって、二人の子供たちの世話はこれが精一杯であった。その合間に、この2人の両親が収容所から出した要求に応えなければならなかったからである。

強制送還

「日本語研修センター」中の33頁目で表に示した家系に話を戻す。これは李修民が作り出した名簿であり、真実でないことは説明した。特記すべき事実は、雅恵は干と結ばれたが、子供は生まれなかったし、正規に結婚した訳でもなかったことである。これは、李修民が後で仲間を呼び寄せるために利用しようとした虚偽である。

この表で叶鵬伯一海雅英の直後の6人が偽叶果正一家である。このうち4人が実在するが虚名であり、それは「念願叶って日本へ」節に、仮名で記載してある。この本物叶の4人家族を除いて22人が付け足されたことになる。最後に記載した雅恵の長女家族は数が合致するが、名前が実在のものとは異なっている。この部分も仲間の呼び寄せに利用されたものと考えてよい。

雅恵の入院で居住者のいなくなったアパートを掃除して、牟田はびっくり仰天する。なんと、電気ポットが7台、電気炊飯器が10台以上、そして電話機が15台以上も出てきたのである。偽叶家族が、所沢センターに滞在中に取り揃え、後から呼び寄せる予定の家族のために用意していたのである。これは、「歓迎されない帰国者」節で説明した。

李一家は荷物をアパートから収容所へ移動することを要請した。そのため、雅恵のアパートを整理していたとき、牟田と藤堂は携帯電話器を3台発見する。この解約は、入管の収容所にいる李の委任状が必要となり、手間がかかった。そのうちに強制送還が行われたため、この電話会社は契約料も使用料も回収できない憂き目に会うのである。気の毒としか言いようがない。

8月8日、牟田は自分から進んで横浜入管へ行き、初めて李修民と妻の徐麗青に面会する。李と徐の夫婦は現状を打開しようと必死である。強制送還が避けられないと悟ると、中国への持ち帰り荷物を増やそうと考えたのだ。そして、

「牟田さん、海中さんは所沢での食材費を含め40万円を持っています。返してもらってください」

牟田はこれを聞いてK病院へ直行する。

「雅恵さん、厚生省が支給金返還を要求しています。持っている金をすべて出してくれませんか」

と雅恵の所持金を確認しようと努力した。2月から5月まで所沢センターは残留邦人のために食材費を渡していた。その一部をくすめて独り占めは許されないと、牟田は思ったのだ。厚生省による返還要求という強圧は雅恵の脳裏にひびいたようで、

「なに、そんなことがあるんですか」

と20万円を差し出してきた。これは李の申告額から大きくかけ離れている。さらにきつく問いただすと、しぶしぶ10万円、合計30万円を牟田に渡した。

翌9日、このうち5万円を持って横浜入管へ李一家に面会に行く。

「海中さんは5万円しか持っていなかった」

と虚偽報告すると、そんなはずはないと李修民。これに対して牟田は

「嘘はついてないだろうな！」

と強く言うと、

「ここで嘘をつく、入管に罰せられる」

この時点で、牟田は雅恵の方が金を隠していると確信した。そして、雅恵も李と同様に悪いとみなしたのである。その後、これが牟田の活動路線を両者平等へと修正していく。

この日の面会で、牟田は李から預金通帳とカードをもらい、銀行口座解約のため李の委任状を

もらった。拇印をおした威圧感のある書類であった。この後、牟田は李の財産をすべて把握することになる。この口座の暗証番号60xyは、後で入管から提示された李修民の正式旅券に記載の誕生日、1960年x月y日とぴったり一致していたのだ。以前に、牟田が理解に苦しんだ暗証番号の謎がこれで解けたのである。

李修民が嘘をついていないと判断して、牟田と藤堂はK病院へ走り、「雅恵さん、厚生省からきつく命令されました。所持金すべて出していただけませんか」

雅恵はさらに追加の7万円を出した。これで、今までのと合わせて37万円となり、細かいところは除いて、雅恵と李の申告額が両者一致した。

李はまだ色々未練があったようで、「湖南省時代の友人」である宋暁文にも面会を申し込んだ。5日後の8月14日、牟田、藤堂、宋の三人で李一家と面会する。宋と李は湖南語でしゃべり、藤堂の理解を妨げた。牟田は李に告げた。

「海中さんから100パーセント回収しました。37万円の7分の6をあなたに返します」

これを聞いた李家族は、面会室のガラスの向こうで、狂喜乱舞、欣喜雀躍、牟田と藤堂に小さな窓穴越しで握手握手の連続であった。完全に信頼しきっている李は、この金をすべて牟田に預けて、帰国用の航空券を割安で購入するよう要請した。入管で買うと、かなり割高になるのである。

2日後の16日に、牟田を驚かさず知らせが横浜入管から来た。

「李家族6名の旅券がとれました」

そして、中国大使館発行旅券のコピーもFAXで送ってきた。彼らの帰国を8月25日と通告したのだった。雅恵の娘を日本へ呼び寄せる手続き上、牟田にとって李一家の帰国は遅ければ遅いほどよかった。そのため、入管には以前からそのような配慮を何度も頼んでいたのだが……。入管にとってみると、次から次へと勾留されてくる違法入国者を収容するために、取り調べが済み次第、外へ出す必要があるのであろう。娘一家の来日手続きにからめた牟田の思惑など、入管はまったく無視した。

御上の命令には泣く子もだまる。19日の土曜日牟田は中華街に出かけ、上海行航空切符6枚を予約した。一人あたり4万6千円であった。しかし、捨てる神に拾う神もあるもので、牟田は救われる。夏休み休暇の混雑で25日送還に間に合う切符が取れないと、旅行社から連絡が入ったのだ。そして、29日に送還が延期された。たった4日の延期だったが、牟田には有難いことであった。実際、寧心たちの中国旅券は8月25日に取得できたのだが、先ほどの送還延期がなければ、中国側は、犯罪に関係したという理由で、旅券発行を取り消したはずである。まさに間一髪であった。事実、寧心の夫の金健生は8月28日に地元公安局に勾留されたのである。

8月28日、それまで幾度となく李に頼まれていた荷物搬入も最後となった。当日、牟田は段ボール箱3つを横浜入管に運び込み、最後の面会を行う。末の児童、冰冰と真真と会うのは止める。泣かれると困るという入管の配慮であった。逆に、大人たち、李修民、徐麗青、李芬、そして李明成との別れのときに、全員、涙が出て止まらなかった。

翌29日、成田空港の裏口から李一家は入管に護送され上海へ飛び立った。

長期入院

8月2日、神奈川県 の要請で生活援護課課長と会見したとき、牟田は県からの助力が期待できると感じた。翌3日、早速、残留邦人に関して、神奈川県の上層にあたる厚生省に電話した。厚生省の回答は、雅恵の娘家族が自費で来日した後の日本語教育を、県が面倒見るというものであった。これで、来日予定の寧心家族の日本での安定生活への目途がついた。

一方、李たちはどうなったであろうか。

10月に入って最初の金曜日、6日に、国際電話が牟田の自宅に入った。

「先生、李芬です」

「え、どなた様ですか……」

牟田には、聞き覚えのない名前であった。

「先生、民芬です」

と言い直したので、牟田はやっと思い出した。李一家がまだ日本にいるころ、22歳の長女を叶民芬と呼んでいたのである。李芬と呼んだことはなかった。

「民芬、元気でしたか。今、どこにいるの？」

「10月4日に、S県から福建省に弟の民生といっしょに帰ってきました。まだ叔父さん、叔母さん、帰っていません」

そして、12日に、李芬から10月5日付の手紙が届いた。半年間の日本生活で、李芬は充分読める日本語が書けるようになっていた。手紙の一枚目を次頁に示しておくが、「牟田、海中雅恵、冰冰、真真、藤堂」は書き換えたものである。これによると、成田から横浜入管に護送されて上海へ帰国し、そのまま全員湖南省S県の公安局へ連れてこられた。叔父と叔母の長女と長男(冰冰と真真)は、9月2日に福建省へ帰宅し、学校に戻ったという。

この封筒には、李芬の叔母、徐麗青が湖南省の公安局で書いた10月2日付の獄中手紙も同封されており、中国語で書いてあった。和訳を李芬からの手紙の後に示しておく。この和訳手紙によると、雅恵の長男果正も、長女寧心の夫とともに勾留されたことが分かる。この2人は李芬たちより前、9月末に釈放されていた。徐麗青は、当然だが雅恵を恨んでいる。雅恵の名誉のため、彼女が政府機関に訴えることなく最後まで沈黙を守ったことをここに強調しておく。

このあと13日に、牟田は李芬に国際電話を入れ、李修民はまだ公安局に勾留されたままだと知る。叔母の徐麗青は10日に公安局から釈放され福建省に帰ってきた。李芬は叔母と、その子供の李冰冰、李真真とともに暮らしているという。この2人の児童は、1年の間に住居も学校も、日本でも中国でも転々と変わった。本事件は、親が間違ふと子に迷惑がかかるという教訓でもある。

牟田先生：お元気ですか。
先生、天气がだんだん涼しくなります。お体に気をつけてください。
私達は日本にいたときは、先生にいろいろなお世話になりました。本当にありがとございました。特別入管局にいたときは、先生忙しいところ、毎度15分程度の面接のため、1つごご時間がかります。いろいろ荷物を持って行きました。おつかれさまでした。ありがとございました。先生は私たちが日本にしている一番いい先生。私たちがここが何をわかります、でも今何でもできない。ありがと。話しますだけ。もし将来はチャンスがあったら、ぜひ先生に報います。
9月29日の夜上海に着いて、湖南省の警察は、連れて湖南省に行ってしまう。そのときは、自由が全然ないですから、電話と手紙をすることができない。だから、いままで先生に手紙を書きます。ごめなさい。どうかお許しください。冰冰と真真、9月11日、お家へ帰りました。ずっと昨日のごご、私と弟、福建に帰りました。でもおじい夫婦まだ帰ります。いつか帰ったら、絶対先生に電話と手紙をします。先生、私はよく夜に寝られず、先生と藤堂先生と、研修センターの先生と、日本にはしてる友達、日本の生活とお思っています。日本には、6ヶ月くらい生活しました。日本の環境がよかったです。本当に日本を好きです。日本に生活したいです。もし正常な手続であれば、ぜひ行きたいとお思います。これは私、一番希望

徐麗青から届いた獄中手紙の和訳（10月2日付け）

牟田先生

お元気ですか。あなたに御便りしたいと切に思っていたのですが、今日手紙を書きます。まず家のもの、大人、子供を代表して心より感謝の気持ちをお伝えします。私たち一家が日本に滞在していた間、各方面にわたり御関心と手助けをいただき本当にありがとうございました。同時に不正な身分で日本に行ったことを申し訳なく思っています。すみません。どうぞおゆるしてください。

8月29日に日本を離れ中国に戻ってからもう1カ月以上が過ぎました。けれど一時もあなたがたのことを忘れたことはなく、また人としてのあなたの誠実さを思い起こします。入管に着いて以後、毎日あなたは私たちのため東奔西走して大変な御援助をいただきお忙しい思いをなさいました。私たちはとても感激し、心に恥じました。私たちは、あなたが私たちに対して下さった愛情は永遠であり、永遠に心にとどめ、一生忘れられることはできません。今後また御縁があり、再会することがありましたら、あなたに報い感謝したいと思います。

私たちは8月29日に入管局より護送され上海に戻って来ました。その日の夜、湖南省S県の公安の人が私たちを公安局に連れて行き調査を進めました。このような訳で私たちは20日以上勾留されています。さらに海中雅恵の息子と娘婿も勾留されています。夫はまだ調査中であり、早く苦しさから離れ自由の身になることを望んでいます。牟田先生、私たちは今思いもしなかった所に歩み至りました。事はすべて海中雅恵母娘のしくんだこととあります。彼女たちは自分の良心にも人としての道徳にもそむき、私たちを日本に連れて行った後、一転して私たちを訴えました。良心のないこんな人たちに良い結末があるはずがなく、天の報いを受けるに決まっています。

牟田先生、私は読み書きがあまり得意でなく、まどろっこしい話で申し訳ありません。あなたが私たちにして下さった御親切に心から感謝し、ありがたく思っています。冰冰と真真も元気で彼らもあなたがたのことを懐かしがっています。

牟田先生、私たちに代わり藤堂先生によりしくお伝えください。

その後、実の息子、叶果正への電話で、李修民が11月3日に釈放され、福建省に帰ったと、牟田は知った。

しかし、牟田の心中はまだ穏やかさからほど遠い。雅恵の娘である寧心家族の来日が予想外に遅れているのだ。御上が決定権を持っているので、どうしようもないことは分かっている、気は重たくなるばかりだった。

話を7月末に戻す。中国湖南省にいる寧心は旅券取得に向けて、あらゆる可能な手段をとった。一般的な話では、中国で旅券を取得するのに最短でも1カ月ということである。寧心はその最短より短い期間で取得したのだ。

7月28日に旅券交付を公安局へ申請して、8月25日には一家5人の旅券のコピーがFAXで寧心から送られてきた。1カ月もかかっていない。これは驚きであった。先にも書いたが、寧心は公安局との対応に素晴らしい能力を持っている。後で分かったことだが、実は、寧心の能力ではなく、親戚の助力であった。

そして、8月28日、李一家を強制送還する前日、横浜入管へ在留資格認定証明書交付申請書類を提出したのである。ここに辿りつくまでに、牟田は奇妙なやり取りを入管とやっている。提出の何日か前に入管で質問したとき、牟田は「寧心は雅恵の私生児です。雅恵は叶と正式に結婚しませんでした。だから、婚姻証明書はありません」

と伝えた。これに対して、入管の説明係が冷たく応答した。

「婚姻証明なしの申請は認められません。書類上は入手必要です」

これは、暗に、偽でもよいから結婚公証書を取得せよという命令である。

16日に、しかたなく満谷が寧心に国際電話を入れると、なんと

「分かりました。取得します」

という。そして28日の申請当日の早朝、寧心から雅恵の夫妻関係公証書が郵送で届いたのだ。実は、李修民も来日前の1月17日に雅恵の結婚公証書を取得していた。これと寧心の取った公証書を比較すると、結婚の年度も日付も異なっていたのである。あらゆるものが金で買える、すばらしい国である。

8月28日に寧心家族の在留資格認定証明書交付申請書類を提出した後、牟田は雅恵が1カ月間入院しているK病院に電話を入れた。

「すみませんが、雅恵さんの入院をさらに延期していただけないでしょうか。今日やっとビザを申請したばかりで、あと数週間かかりそうです」

「腰の精密検査の必要もありますからね。ただし、3カ月までにしてください」

3カ月を過ぎると、国から病院へ支払われる費用が激減するのだそうだ。このときは、9月中に在留資格が得られるだろうと楽観し、まさか本当に3カ月が過ぎるとは夢想だにしなかった。

この日の夜、交付申請したことを伝えるため、藤堂が寧心の娘、金華月に電話を入れた。ところが、予想外の事件が起こったことを知ることになる。

「ウェイ、華月、横浜入国管理局でビザの申請書を提出しました」

と藤堂が話すと、

「でも、大変です！ 父が公安局に出頭して、まだ帰ってきません……」

次の日、もう一度、藤堂が寧心の長女に電話したが、父の金建生はまだ公安局から帰っていないという。李一家強制送還の一日前の話だから、S県公安局は事前に勾留と送還を知っていたことになる。横浜入管から情報を得ていたのであろう。金建生の勾留は九月末近くまで続くことになる。

一方、H市で捕われの身の叶家族はどうなっただろうか。H市にいる間は、日本から李修民が毎月1万円を仕送っていた。このお金は、もちろん、所沢センターで支給された食材費からやりくりして出していたのである。1万円もあれば、4人家族が1カ月間H市で生活できるという。その間、S県の田畑は荒れに荒れ、当年の収穫はゼロであった。そして、8月末、叶果正は、金建生とほぼ同時に同じ公安局に勾留された。妻の王悠蓮、娘の叶銀紅、息子の叶群はS県の自宅に戻った。直接この家族から情報を得なかったが、叶果正も9月末に、金建生と同時に釈放されたという。

叶が勾留されていた9月、家族は生活が大変だった。家にある金はほとんどすべて公安局に没収され、食うや食わずの暮らしであった。李修民に家族の旅券を売り渡した代金、3万円も没収された。残った家族三人、妻、娘、息子は困窮生活を雅恵に手紙で訴えてきた。娘の銀紅が中部地方の県庁に出した9月6日付け手紙が神奈川県を通して、20日牟田に回送された。彼らは、身元引受人の牟田を知らず、初期の身元引受人M氏の住む県庁所在地宛てに郵送したのである。次に手紙の大意を翻訳してある。

おばあさんへ

こんにちは。ごぶさたですが、お元気ですか。父に起ったことについて何のことか分からないかもしれません。父は牢屋に入れられ、ぶたれたりして、心が痛みます。家にあったお金も持って行かれ、母はおばさん(著者註:寧心)に助けを求めましたが、断られました。おばさん達もそんな余裕はないのです。私達はなすべがなく、日本からお金を送ってもらいたいと思います。おばあさん、父を助けてくれませんか。

父はどのくらい牢屋に入れられるか分からず、彼の一生はこうして終わるかもしれない。母も父のために奔走し、泣きぬれている。私に対して父母は、あるルートで台湾へ行くようにと言うが、私は行くつもりはない。私はなすべがなく、父は私が希望だと言う。今はこんなことで、どうしようもない。おばあさん、手紙を受取ったら直ぐ、送金してください。私たちは命を救う、そのお金を待っています。おばあさん、あなたの身辺健やかなればと思います。私達はあなたの傍にいないので、助けが必要なときは政府にお願いして下さい。政府はあなたを助けることができると信じています。

おばあさん、私たちはあなたが健康であることを祈っています。

あなたの孫、銀紅より 2000年9月6日

(附: おばあさん、あまり気をもまないでください。ご自分のことをなさってくださいばいいです。)

愛情あふれる孫娘からの手紙を読んで、雅恵は牟田に相談した。

「先生、もし余裕があれば、嫁に10万円送ってください」

雅恵の家計を牟田が采配しているの、雅恵が相談してきたのである。この金額は限度近い額だったが、9月末に東京駅近くの中国銀行から嫁の王悠蓮へ送った。このお金が王悠蓮に到着したことを、10月初めに満谷が寧心に電話して確認した。

11月の初めに叶果正は借金して電話を自宅に設置した。この情報をFAXで受け取ると、牟田と藤堂は連絡の電話を入れ、彼らの窮状を確認した。叶一家がH市に一時転居している間に、S県にある田畑の農作物が全滅したとのことであった。そのため、農民でありながら借金して食糧を購入するという皮肉に陥っていた。

さて、入院中の雅恵と中国の娘寧心はどうなったのであろうか。

在留資格関連の書類を8月28日に提出後、素早く資格認定されるものと信じていた牟田と藤堂であった。しかし、厚生省は寧心一家来日を要請しながら、その後のフォローがない。これは縦割行政の弊害である。入管のトップに直訴して泣きを入れ、申請から2カ月が経過しても、目立った効果がなかった。

この申請から2週間が経過して、神奈川県的生活援護課の3人がK病院を訪問した。これは、偽の同伴家族に支出した公金の返却命令を厚生省が出す前に、雅恵が残している金額を確認しようというものであった。雅恵に代わって牟田が答えた。

「厚生省が支給した公金は、日本定住と強制送還に要した費用として、あらかた消えています」

この後、2カ月経った11月半ば過ぎ、厚生省から返却命令が来た。

これに対して、

「現在の所持金は現金1万円程度であり、他に資産はありません」

と回答した。翌年2月に厚生労働省から1枚の紙切れが届いた。

「永住帰国者証明書」

これには、最初の支給決定通知書にあった偽息子一家6人の名前が記載されていない。最初の帰国者には国から生活援助金がでることになっている。偽家族に支給した金を「支給しなかつ

た」ことにして、厚生(労働)省はメンツを保った。

母親を看病し世話する目的で来日する予定の雅恵の娘、叶寧心の家族は、9月中に日本へ行けると信じて、3人の子供たちのうち2人を学校に行かせていない。就学費用がかなり高いので、それを来日費用に回すことにしたのである。もちろん、勾留された夫の金建生にも保釈金が必要であった。彼の釈放後、10月11日の夕方に電話を入れると、12歳の息子、金威生が応答した。「稲刈りで、家には僕しかいません。家にはお金があり、生活に困っていません」

2期作目は順調だったようである。

9月も過ぎて、やきもきしているうちに、雅恵入院の期限である3カ月目の10月20日が近づいてきた。10月半ば、ケースワーカーの中石がK病院で雅恵の意志を確認し、雅恵の退院と自宅療養が決まった。週に3日間のヘルパー訪問、3日間の昼間サービス、それに5日間の夕食配達も決定した。昼間サービスでは、午前午後の6時間老人ホームを訪問し、風呂に入り、昼食が出るとのことである。

10月20日、退院の日がやってきた。アパートへの帰途、雅恵を連れて横浜入管へ立ち寄った。在留資格関連の書類を提出した部門主席と、入国管理局の次長に相談するためである。この次長は、李一家の強制送還前日、牟田に会見して勾留に至るまでの苦労をねぎらっていた。しかし、今回は事務的な応答のみで、牟田の期待した助けは得られなかった。この部門主席は、申請書提出後の変化、特に雅恵の介護状態の詳細を上申するように助言した。さらに、本申請への厚生省の関与を簡単に記述することも要請した。

23日に上申書を持参した際、この主席は牟田に尋ねた。

「牟田さん、寧心は本当に雅恵さんの血が繋がった子ですか？」

「主席、この数カ月の間、雅恵から話を直接聞き、また中国の寧心とも頻繁に電話連絡しました。心証的には実の親子関係があると思います。雅恵の自立アドバイザーの藤堂も通訳の満谷も同じ意見を持っています」

入国管理局の一番の関心は、親子関係が正当かどうかにあるようだ。この牟田の返答に対して主席が言った。

「牟田さん、客観的な証拠が欲しいのです。本事件が生じる前の手紙等ありませんか。例えば、母から娘への愛情のこもった手紙です」

「主席、雅恵さんは娘と息子と一緒に生活していたので、手紙はありません」

そして、牟田は付け加えた。

「雅恵と寧心との親子関係を実証する公証書を提出しました。私には他に公的な証明書を取得する力がありません。もし実の親子でないというのなら、入管側でその証拠を出してください。これは、裁判で国側が有罪の証拠を提出するのと同じでしょう。もし実の親子でないとの証拠があれば、本申請の却下に甘んじます」

さらに牟田は、1980年に雅恵が息子および娘といっしょに提出した帰国申請書類のコピーを入管に送るように厚生省に依頼した。牟田は駄目押しのつもりであったが、これが後で波紋を呼ぶようになる。やぶ蛇だったのである。

さて、雅恵が退院した後の話に戻そう。帰宅後、生活上の問題が色々出てきた。2日後に、緊急電話が雅恵から入った。

「先生、たいへんです！ 風呂の水がとまりません」

雅恵の生活経験は戦前のもので、ガス器具、電気器具の利用が覚束ないのだ。

1週間たって、ガス風呂の追炊きを16時間連続でやってしまう。幸い、湯がたっぷりあったため、風呂釜は損傷しなかった。11月に入り、寒さが増してきた。雅恵は腰の古傷、手足のしびれを訴える。そこで、事故が恐くて躊躇していた暖房器具を、どうしても入れなければならなくなった。まず、ホット・カーペットを導入した。足腰の裏はいいのだが、全体が温まらない。結局、電気コタツを置いた。座る時と、起き上がる時に非常に苦勞するが、これ以外に選択の余地がなかった。いずれ、これらの失敗談や苦勞話は懐かしい記憶として語り継がれて行くのであろう。

匙を投げられる

11月も半ばを過ぎ、申請書提出から3カ月、雅恵退院から1カ月近く経過した。雅恵はアパートでの一人暮らしに慣れてきた。それでも、牟田と藤堂は相変わらず交替しながら、雅恵の世話を毎日のように続けていた。入国管理局からの在留資格認定交付があまりに遅いと感じた牟田は、11月24日の金曜日に入管で永住関係の部門の主席と会見する。開口一番、この主席は「牟田さん、見通しは暗いです」

この一言に、牟田は心臓が一瞬止まった。これは交付不可能と宣言されたも同然だった。しかし、気を取り直して、

「どうしてですか？」

と尋ねた。

「厚生省から送られてきた1980年の雅恵家族帰国申請書と、8月末に雅恵さんが提出した書類との間に整合性がありません」

これに対して牟田は、

「どこに不整合があるのでしょうか？」

と聞いた。

「それは公表できません」

という返事であった。

最後に牟田は次のように付け加えた。

「主席、この申請は8月28日に出したのですよ。それから3カ月は長すぎませんか。却下でも、認可でもどちらでも構いません、今月一杯で結論を出していただませんか」

帰宅後、牟田は、不整合があるとしたら、

一、雅恵の結婚公証書

二、誕生日

このうち、どちらかに違いないと見当をつけた。そして、この不整合の原因を追求しはじめた。

週が明けた月曜日の11月27日、牟田は1980年の帰国申請書のコピーを極秘で入手した。日本語の部分と中国語の部分とに分かれていた。これに雅恵の結婚公証書は含まれていなかったが、日本語部分の娘の誕生日が、1957/6/21から1958/6/21に、1年ずれこんでいることに気づく。これは、満年齢を数え年だと勘違いして計算したと考えれば説明できる。数え年は中国で普通に使用する年齢である。もっとも、雅恵と息子の誕生日は、3カ月前に申請した年月日とそれぞれ一致しているのだから、娘だけ異なるのは不自然ではあるが。

この程度の違いは、まだなんとか言い逃れができる。しかし、共産党上層部への提出形式で書かれた中国語の申請書には手を焼いた。牟田は中国語を話せないが、簡体漢字を読むことはできる。娘の中国語申請書には、誕生日が「1958/6/1」と書いてあるのだ。帰国申請書の日本語部分の日付は、先に示した通り6月21日である。今度は21の2を書き忘れたと言い訳しなければ……。

「でたらめな人たちだ。迷惑な誤りにもほどがある」

と思い、込み上げてくる怒りを抑えながら、牟田は藤堂に電話した。

「藤堂さん、申請書の中国語部分を翻訳してくれませんか」

FAXを送ると、しばらくして返事が来た。

「素直に翻訳不可能です」

この後、東京入管に助言を請うと、

「1980年の書類はそれでなんとか片が付くでしょう。雅恵と寧心の手紙の代わりに、同時に写った写真が手に入りませんか？」

なるほど、それは盲点であった。

そして、翻訳家の満谷にお出まし願うことになった。その日の夜、牟田と藤堂の前で、しばらく文章を見ながら、満谷は言った。

「普通の中国人が書くような、まともな文章ではないですね。人の話を聞き取りながら、誰かが無理やり作文したという感じです。しかも文章になっていません」

とりあえず、雅恵たち本人が申請書を作成したわけではなさそうである。だから、このような誤りが生じても不思議はないと牟田は納得した。しかも、これら3人の中国語申請書はすべて同一字体で、同一人物が書いたことは見え見えである。その上、子供2人の署名まで同一字体で、この同一人物が書いたと分かる。

「これで、横浜入管に対して、1980年帰国申請書の不整合を説明できる！」

この後、中国の寧心に電話を入れた。東京入管の助言に従って

「華月、お婆さんとお母さんが写っている写真を、全部こちらに送ってください」

と要請した。寧心は標準語ができないため、いつも長女の華月が応対した。

牟田は翌朝、藤堂と雅恵を連れて、横浜入管へ急いだ。部門主席は不在であったが、審査担当の係官は牟田に肩透かしを喰らわしたのである。牟田が不整合の説明をはじめる前に、この係官は

「牟田さん、この案件は私たちの手に負えません。本局に上げました」

と言った。牟田は驚いて、

「もうここで審査しないのですか。どこで審査するのでしょうか？」

「東京入国管理局です」

これ以上、牟田の説明を聞く姿勢を見せなかった。これは責任回避、敵前逃亡である。

翌日、念のため横浜の部門主席に電話で話したが、この若い係官と同じ答えであった。横浜入管の正しい名称は東京入国管理局横浜支局である。横浜支局は雅恵の娘の入国申請に関して、“却下とも認可とも判断できません”と匙を投げたのであった。

娘家族の来日

牟田に残された道は東京入国管理局との交渉しかないように思えた。しかし、昨日の電話で、横浜支局の部門主席は

「あくまで本申請の直接窓口は横浜支局です」

と強調したのである。これでは東京入管の審査官もしくはその上司と直接交渉ができなくなる…。牟田の気持ちは暗くなるばかりであった。

しかし、なんとか牟田は気を取り直した。横浜支局と交渉をはじめる前に、牟田は雅恵たちが1980年申請書類を作成しなかったことを実証しようと試みた。申請を勧めた(雅恵の従弟の)M氏に訊くのが最短の道であると考え、11月29日の夜、牟田は中部地方に住んでいるM氏に電話した。

「1980年の帰国申請書は誰が作成したのか、ご存知ありませんか？」

「それは、県の老人福祉課のN氏です」

満谷の指摘した通り、作成したのは中国人ではなく日本人であった。しかも、日本に在住する日本人である。牟田は元気を取り戻し、M氏が教えてくれたN氏の住所と電話番号を何度も復唱しながら鉛筆書きメモからパソコンに打ち込んだ。そして、藤堂へ

「これ重要な証言者になるかもしれません。メモしてください」

と電話した。もちろん、翻訳者の満谷にも

「一歩前進です」

と電話で伝えた。すると、

「牟田さん、私たち横浜入管に勝ったのよ！」

と、入管による責任回避を非難しながら、満谷は晴れ晴れとした声で応答した。

翌30日の朝、牟田は中部地方のN氏に電話を入れると、

「M氏に頼まれて、雅恵さんの帰国申請書を作成したことを覚えています。入国管理局に要請されれば、証言いたしましょう」

牟田は眉間から皺が何本か消えて行くのを感じ、安堵の胸をなで下ろした。

2日後、古い写真九枚が寧心から送られてきた。依頼した通り、雅恵が娘と一緒に写っている写真であった。

牟田は、これで強力な支援体制が、雅恵と寧心の血縁関係を立証するために整ったと喜んだ。というのは、横浜支局がこの関係の確かな証拠を要求していたからである。週が明けて、12月4日に次の2点を強調した上申書を新たに提出した。

- 1) 1980年の帰国申請書は雅恵たちが作成したものでなく、誤りが存在し得る。
したがって、今回の在留資格認定申請書との不整合があっても不思議はない。
- 2) 8～23歳の間、寧心と雅恵との一体生活は写真から明白である。

これで、牟田は横浜支局に対して考え得るすべての対策を取った。あとは、御上の判定が下されるのを待つだけであった。

しかし、待てど暮らせど返事が来ないまま年が明けてしまうのであった。8月末に在留資格認定申請書の交付要請から4カ月が過ぎた。異常に遅い。犯罪に関わりがあるとはいえ、自立不可能な残留婦人の世話のために娘一家の呼び寄せをここまで遅らせる……。牟田には信じられなかった。ここまで来たら、交付要請が却下される訳がないと思っても、不安はぬぐい切れないのであった。まして、中国で詳しい事情が分からないまま待たされている寧心たちは、不安というより、錯乱に近い精神状態であったに違いない。それは、頻繁に電話で説明を繰り返しても、消え去ることはなかったようだ。

年の明けた2001年1月20日、雅恵が白内障手術からの退院の日であった。雅恵を自宅に送って帰宅すると、牟田は不在持帰郵便の案内書を見た。

「横浜支局からの書留、持ち帰ります」

やったー、ついに来たと嬉しくなった牟田は郵便局に電話を入れた。午後9時に、彼は在留資格認定申請書5通を取りに大雪の中を車で走った。申請からほぼ5カ月の長い道のりだった。帰宅したその場で中国の寧心宅に電話を入れた。

「Hello, this is Muta. May I talk with HuaYue?」

応対に出た寧心は、これだけで長女の華月を呼んでくれる。標準語と外国語は彼女しか話せないからである。牟田は中国語が分からない。

「Hi, HuaYue, we've got the five certificates we have long been waiting for!」

これだけで、華月は在留資格認定申請書5通の取得を理解してくれた。傍で寧心たちの喜びの歓声が上がった。

「Tonight, Mrs. Tohdo will talk to you. Stay home. OK?」

その晩、自立アドバイザーの藤堂が華月に詳しく経緯を中国語で説明した。翌日、翌々日と牟田は関連官庁部局に取得報告するとともに、今後の対応について話し合った。特に、生活保護と日本語研修は必要不可欠であり、県と区を念入りに訪問して回った。

しかし、いばらの道はまだ続く。寧心一家来日まで、さらに2カ月近くかかったのである。雅恵の娘、寧心が所持金を使い果たし、借金していることは電話と手紙で牟田にはよく分かっていた。特に、昨年8月に夫が公安局に勾留されて、大きな罰金を取られたのが応えている。

在留資格認定申請書の郵送から4日後の1月24日、湖南省の寧心へ満谷が電話を入れた。

「ウェーイ。満谷です……」

これだけで、寧心は華月に電話を渡した。牟田の場合は英語、満谷と藤堂の場合は標準中国語が必要となるので、寧心は必ず17歳の長女、華月にバトンタッチした。それに加えて、この子は師範学校に通っているだけあり応答が速く、的確であった。ただ、英語の語数が多くないので、細かい話は満谷が中国語で請け負った。満谷は”出境証明、予防注射、迎への日程”について具体的に話し出した。

「中国から出国のための出境証明は期限切れになってないですか?」

— 期限は切れていません。

「予防注射はどこで、何日かかりますか?」

— 長沙で行います。丸1日かかります。

「2月13日にS市に到着します。ホテルを予約して欲しい」

— はい、分かりました。

とんとん拍子に話が進行し、2月16日には来日の見通しがたった。牟田は、しかし、石橋をたたいて渡ろうとしていた。旅券添付の出境登記カードでは不安を感じたのである。それには出境事由として「短期出境」とあり、定住で出国する際に空港でもめる可能性を感じた。これは取り越し苦労だと判明するが、逆に、来日を遅らせることとなった。

出国定居証明を取るには入管発行の在留資格認定証明が必要だと、寧心が電話連絡で訴えた。牟田はその5通の証明を国際特急便で寧心に送付、これで一安心と胸をなでおろした。それから半月が過ぎた2月15日、寧心からFAXが届いた。

「主人の出国定居証明が取得不可、公安局が許可しない」

金建生は、去年9月の1カ月間、公安局に拘留されており、そのために出国定居証明が出ないのであった。その夜、寧心に電話を入れ、金建生を除く母子4人で来日の意志を確認した。

牟田は、それでも、建生の出国可能性を探るため、短期出境証のコピーを寧心から郵送させた。確かに無期限に有効の出境登記カードである。出国定居証明がなくても出国できると牟田は予感した。しかし、寧心は牟田の動きを、出国不可と感じ、諦めの境地に立ったという。5人とも来日を取り止めの決心もついたと言う。そうであろう、去年8月から6カ月も不安な借金生活を続けていたのだから。

これ以上遅らせても益がないと判断し、寧心に電話を入れた。牟田は3月1日に北京着、3月12日成田帰国の航空券を購入した。満谷に連れて行ってもらうことになった。3月3日には寧心たちも北京へ来る予定となった。

3月1日に北京到着し、寧心に電話を入れると、またも一転、
「3月5日にならないと、母子4人の出国定居証明が出ません」

という。実情がさっぱり掴めない。牟田は翌日にも寧心を訪問し確認することを決断し、ホテルで翌日の長沙行き航空券を予約購入した。2日に長沙着、1泊して、翌3日に200キロメートルの長距離タクシーを貸し切り、S県へ到着した。牟田は寧心の兄と、続けて寧心、子供たち3人と抱擁し、涙をぬぐった。長い道のりであった。母親の海中雅恵に李修民が接触してから4年以上の歳月が流れていた。住居はレンガ作りではあるが、ガス設備がなくトイレ室もなく、戦前の日本の田舎を想像していただければ寧心一家の生活が理解できる。水道は汚れていて直接飲料には適さない。カメに汲み置いて使用していた。

S市への帰りのタクシーの中で、寧心が突然思い出したように、
「”あいうえお、かきくけこ……。” 幼い時、母から聞きました。紙と鉛筆がなかったので、書くことはできませんが……」

牟田の目が潤んだ。長沙 - S県の往復には、雅恵の2番目の夫、叶鵬伯の親戚2人に世話になった。

3月8日に北京西駅へ寧心一家5人を迎え、その足で日本大使館領事部にビザの申請を行った。寧心一家は所持金が数百元(数千円)しかなく、牟田だけでなく、雅恵の親類M氏の息子さんからも世話を受けた。寧心一家の北京滞りも彼の経済的支援を受けたのである。これは、牟田にとってありがたいことであった。厚生省も県も、当然ではあるが、支援を断って来ていたから、なおさらであった。

2000年2月に成田での旅券チェックを厚生省と法務省が怠った付けは、民間人の牟田に回ってきたのである。一方、県は別の合法手段で牟田を経済的に支援した。人間味あふれる行為であった。

15日にビザ発給となり、それまでの間、この息子さんに万里の長城へ連れて行ってもらった。所用で満谷が先に帰国したため、中国語のできない牟田は寧心一家のホテルに5日間転がり込み、日本語を教えた。「あいうえお」からはじめて、生年月日が言えるまでになった。掛け算もできた。どん底から這い上がろうとする田舎の家族にとって、軽い勉強だったに違いない。このホテルは国内専用であったが、副支配人と親しくなって密かに中国人として泊めさせてもらった。

3月16日早朝、この副支配人の好意で借り切ったマイクロバスに6人が乗り、北京首都空港へ。空港で問題が続出し、牟田は命が縮む思いであった。空港内には関門が数多くある。2番目で国際健康証明書を要求され、寧心家族は不所持で真っ青になった。事前に日本大使館、北京在住日本人、頻繁日中往復中国人から不要と確認していたが、牟田の不安は募った。厚生省の身元引受人証明書と寧心一雅恵家系図を見せ押し問答。

「日本大使館も日本政府も不要だと言いました」

ということで押し通し、なんとか通過。英語でのやり取りであった。

次の関門では冷や汗をかいた。寧心の夫、金建生が10分以上も調べられたのである。牟田の手が及ばない所で、旅券を虫眼鏡で仔細に見ていた。半年前、8月末の拘束の件で湖南省からの移住を厳重に調べていたのであろう。本物の旅券なので、牟田の心配は大したことなかったが、やきもきした。釈放後、健成と握手握手の連続であった。

機内に入って、寧心が

「旅券を紛失した！」

と訴えた。土産品店に戻っても見つからない。機内に戻り、バッグを見るとそこに……。3時間後やっと無事に成田空港着。16日間留め置いた車に乗り込み、寧心の母が待つ横浜のアパートへ到着。二人泣き崩れて抱擁……。短かったのか長かったのか1年強のブランク後の再会だった。

しかし、国の機関の非協力にもめげず突き進んだ甲斐があり、寧心一家の旅券取得が滑り込みセーフ。2、3日遅れていれば来日は儘ならず、5年間待たされる場所であった。

翌週月曜日の3月19日、区役所で外人登録、生活保護申請、下2人の小学校／中学校入校手続きを済ませ、上3人の日本語学校へ。慌ただしい一日を終え、牟田の仕事が一段落した。それは、さらに長い定住援助の始まりでもあった。

あとがき

私にとって、李一家との付き合いは短く、たった5ヶ月でした。彼は3年以上にも及ぶ万全の準備を経て、わずか6ヶ月あまりで日本在留を終えました。万全は完全ではなかったのです。彼にとっては悔しかったことと思います。

しかし、旅券偽造は犯罪であり、日本定住は国民税金の違法支出にあたると思われました。これが彼らの強制送還を支持した唯一の理由です。個人的には、李一家が今でも友人であることに違いありません。

本書では、主人公の海中雅恵の罪について、まったく触れていません。この事件は雅恵の息子が家族の旅券を李に売ったことに端を発しています。もちろん、李一家と一緒に帰国した雅恵が、本件にまったく関わっていないはずがありません。刑事事件なら、雅恵は違法入国幫助犯といったところでしょうか。この事件を行政処分として取り扱ったことが、雅恵に罪をかぶせず、不安なく日本に住める条件だったのです。李一家の旅券の違法性を通して強制送還を行う一方、雅恵の旅券が適法であるという理由で雅恵が無事に日本で暮らせるのです。

その代わり、雅恵が払った犠牲は甚大でした。厚生省からの定住準備金の大部分は李一家に移り、娘一家を呼び寄せるのにぎりぎりの財力しかありませんでした。息子一家は中国に取り残され、旅券を李に売って得た大金も公安局に没収されたのです。李一家勾留後ただちにはじめた娘一家の来日手続きは、5カ月以上経っても終了せず、その子供たち2人は学校にも行かせてもらえませんでした。そして、雅恵は一人で自立できないまま、ヘルパー、藤堂、そして牟田の訪問を首長く毎日待たなければなりません。

そんな中、うれしいニュースが飛び込んできました。2000年11月7日の朝日コムの深夜ニュースで、「中国残留婦人の義理の息子らに特別在留許可」ということでした。吉原順子さん(87歳)が55年前に避難する途中で、息子さんは死に、夫と生き別れました。1970年、先妻を亡くし三女一男を抱えた中国人の陶さんと再婚しました。この主人が死亡、1994年に永住帰国し埼玉県に住みます。1997年、「実子でなければ家族と認められない」として、義理の息子はビザ更新が許可されず、東京入管に収容されました。そして、この7日、一家に在留許可が降りたのです。

このうれしさも、東京入管横浜支局のスロー審査に直面して、喉元過ぎれば熱さを忘れるようには行きませんでした。雅恵の娘一家の来日は、この時点でまだ予断を許さなかったのです。娘寧心は雅恵の実子である点、まだ来日していない点で、吉原順子さんの件とは違うが、法務省はこの在留許可を契機に寧心家族の来日をまもなく許可するのでは……。私のこの予感がはずれ、横浜支局はいったん匙を投げたのです。

海中雅恵と李一家は、日本でうまく共生できる道もあったと思います。仮に、私が偽家族に気づくことなく、この二家族がうまく生活できたとしたら、どんな問題が生じたでしょうか。何も生じなかったと思います。この仮定を現実化する一条件として、李は、旅券を売ってくれた叶果正一家を安泰な環境に持って行こうとしたのです。叶家族を「故郷に錦を飾る」形で元のさやに戻らせるという大胆さが失敗の原因でした。

李は雅恵が契約違反したと収監中も帰国後も牟田に訴えていました。というのは、横浜引越前に雅恵が所沢で厚生省に偽家族を告白しており、李は所沢でそれを所員から知らされていたからです。だから、李は国が直接自分たちを逮捕したと思ったのです。しかし、牟田には告白の知らせはありませんでした。李は国際電話で、「横浜への引越し後、気が休まることがなかった」といっていました。

厚生省と法務省は謙虚に民間人の声を聞く耳を持つべきでした。何しろ、民間人でも感じた旅券偽造を厚生省は成田空港で検査もせず、民間人でも分かった申請書作成委託を法務省は横浜支局で気が付かなかったのです。政府機関という実体が有るわけがなく、中で働くトップが国の機関(の代表)として責任を持って明確な決断を素早く下すべきだと感じました。

雅恵を世話する牟田や藤堂、通訳家の満谷、それに中国の寧心家族、全員が7カ月もの長きにわたり立ち往生しました。このような精神的な苦痛を最小限に抑えることが、実権を持つトップの責任だと思います。寧心、雅恵、藤堂、満谷、そして牟田は沓を隔てて痒き 蹠^{かゆ}を搔くばかりでした。

娘家族呼び寄せに至るまで過大な苦勞が次から次に生じました。なにしろ、長年いっしょに暮らした親族ではなく、赤の他人家族に連れられて、日本婦人が帰国したのです。金に目が眩んだとはいえ、この行為自体が不可解で、苦勞の連続は当然といえば当然でした。

ともかく、雅恵を世話する肉親が来日しました。あとは、中国に残った雅恵の孫二人、銀紅と群、それに李の子二人、冰冰と真真の成長が気にかかるとともに、楽しみでもあります。もちろん、来日した寧心の子三人、華月、光月、威生の成長も明るい希望です。

2002年弥生

牟田不作

追補：2016年霜月

中国へ戻った家族の中で、当時小学生だった真真は2013年暮れに来日した。

彼は大連にある大学を卒業し、京都で大学院に入学し、2016年3月卒業。

現在、日本の環境関連企業で働いている。2010年に彼の父が私を中国へ招待してくれた。